



京機短信

KEIKI short letter

No.350 — No.363

京機会(京都大学機械系同窓会) tel. & fax. 075-383-3713

E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp

URL: <http://www.keikikai.jp> 編集責任者 吉田英生

京都の散歩道

- (0) ミステリーでも京都はすごい——西村京太郎、山村美紗、綾辻行人
..... 2021年 2月 (No. 350)
- (1) 市の区分け 2021年 3月 (No. 351)
- (2) 愛宕山と比叡山 2021年 4月 (No. 352)
- (3) 平安京 2021年 5月 (No. 353)
- (4) 本能寺の変——明智軍の進軍ルート 2021年 6月 (No. 354)
- (5) 祇園祭と貞観時代 2021年 7月 (No. 355)
- (6) 国際日本文化研究センター データベース 2021年 8月 (No. 356)
- (7) 「竹取物語」と八幡竹 2021年 9月 (No. 358)
- (8) 出版社 2021年10月 (No. 360)
- (9) 泰斗による中国歴史研究 2021年11月 (No. 361)
- (10) 桑原武夫先生たちによるフランス革命研究 2021年12月 (No. 362)
- (11) 井上靖さんと朝比奈隆さん——文学と音楽の巨匠
..... 2022年 1月 (No. 363)
- (12) 李登輝さんと彭明敏さん——台湾民主化の二人の父
..... 2022年 2月 (No. 364)

ミステリーでも**京都**はすごい——西村京太郎、山村美紗、綾辻行人

編集人 吉田英生 (S53/1978卒)

外出自粛の中、編集人はミステリーについて大して詳しい訳でもないのですが、最近の投稿が少ないこともあり、京都にまつわる話題をお届けしたいと思います。

その前に、イギリスから“ミステリーの女王”アガサ・クリスティー(1890～1976)の自薦十選は、数藤康雄氏(アガサ・クリスティー百科事典作品・登場人物・アイテム・演劇・映像のすべて、(2004)早川書房)によると、以下のとおりです。

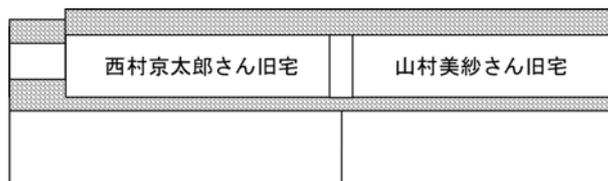
最初の選出は小規模なもので、結果にはそれほどほどの意義はないのだが、重要なことは、翌年その結果をクリスティーに知らせ、クリスティー自選ベストテンを聞き出せたことである。クリスティーは「その時どきの気分で作品は変わる」としながらも、以下のベストテンを披露した(ただし順位は無し)。『そして誰もいなくなった』『アクロイド殺し』『オリент急行の殺人』『予告殺人』『火曜クラブ』『ゼロ時間へ』『終りなき夜に生まれつく』『ねじれた家』『無実はさいなむ』『動く指』一般のミステリ・ファンからはあまり評価されていない『終りなき夜に生まれつく』や『無実はさいなむ』を挙げていることには、多いに注目すべきだろう。

『そして誰もいなくなった、And Then There Were None(1939)』は名作中の名作ですよね。これをベースとして『殺しの双曲線(1971)』を書いた西村京太郎さん(1930～)と『十角館の殺人(1987)』を書いた綾辻行人さん(1960～)の対談では以下のようなやりとりがあります(西村京太郎、新版 名探偵なんかこわくない(2006)講談社；綾辻氏の作品の方が後出なのに、以下で“自分の『十角館の殺人』と相通じる点がいくつも見つかって”という表現は、少し違和感ありますが)。

綾辻 『殺しの双曲線』は最近久しぶりに読み直してみたんですが、やはり傑作だと思いました。クリスティーの『そして誰もいなくなった』への挑戦、ですよ。閉鎖された状況の中で連続殺人が進行する、いわゆる吹雪の山荘もの。自分の『十角館の殺人』と相通じる点がいくつも見つかって、今さらながら驚いたりもしました。

西村 クリスティーがすごいのは、彼女の作った作品の枠組みかどこでも通用するってことなんだよ。ある種のパターンを作り上げてしまった。舞台がイギリスでも日本でも、どこでも使える。

綾辻さんは京大教育学部卒で推理小説研究会出身。一方、これまで超人的にも600を超える作品を世に出している西村さんは1980～1996年の間、京都在住。そして、京都が生んだ“日本のアガサ・クリスティー”山村美紗⁽¹⁾⁽²⁾さん(1931～1996、作品数は360)が西村さんにファンレターを送ったことがきっかけで、お二人はその後、産寧坂そばの大きな旅館を共同で買い取り、本館と別館とが鍵付きのドアのある廊下で繋がっていたそうですね⁽³⁾；「母と西村先生の関係は、ライバルであり、戦友であり、よき理解者同士だったのだと思います」と娘の山村紅葉さんは語っています⁽⁴⁾。



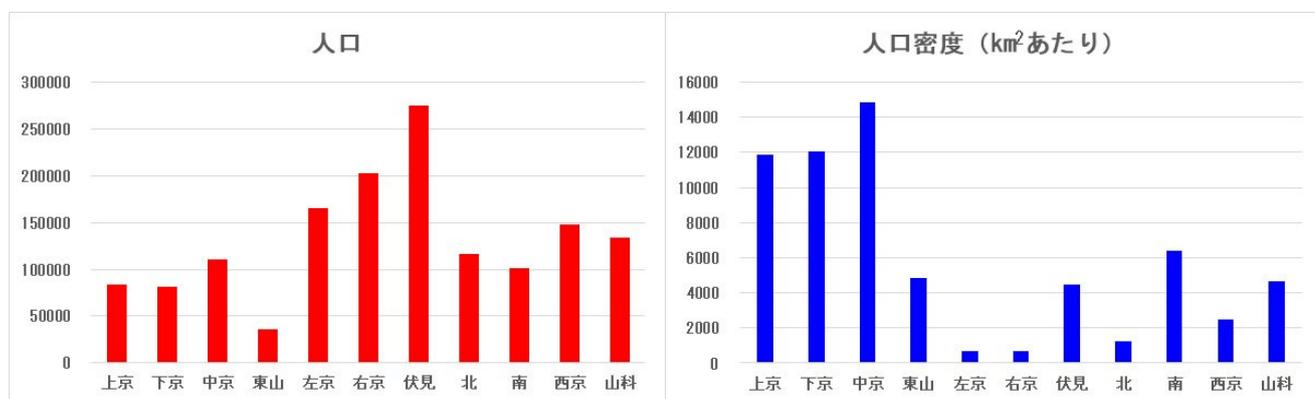
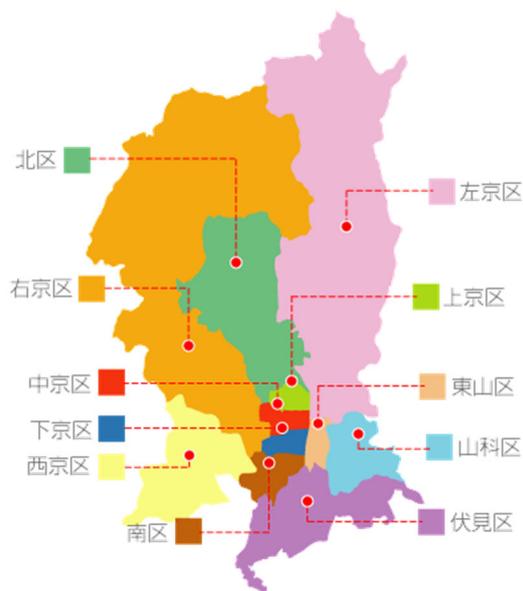
(1) 例えば、山村紅葉さんが選ぶ山村美紗「京都ミステリー」傑作長編は以下：京都嵯峨野殺人事件(1985.8)、京都不倫旅行殺人事件(1985.10)、京都茶道家元殺人事件(1987.2) (2) 山村紅葉、京都ミステリーの現場にご一緒しましょう(2015)PHP研究所 (3) <http://mainichi.jp/sp/shikou/46/01.html> 嗜好と文化 vol.46 西村京太郎 (2018.4)毎日新聞 (4) 山村紅葉、おきばりやす (2001) 双葉社

京都の散歩道 (1)市の区分け

京都に関するちょっとした話題を連載でお届けします。まず区分けを調べてみました。わが左京区が広大（2005年に右京区が旧京北町と合併するまでは市内最大）なのはよく知られていますが、その北端は三国岳（同名の山は多いのでご注意ください：[https://ja.wikipedia.org/wiki/三国岳_\(滋賀県・京都府\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/三国岳_(滋賀県・京都府))）、南端は蹴上辺りで、南北に約35km。



区	人口と密度 (/km ²)		設立
上京(かみぎょう)	83520	11881	1879
下京(しもぎょう)	81951	12087	1879
中京(なかぎょう)	110166	14867	1929
東山	36173	4836	1929
左京(さきょう)	165727	672	1929
右京(うきょう)	202390	693	1931
伏見	275335	4465	1931
北	116577	1229	1955
南	101540	6423	1955
西京(にしきょう)	147900	2497	1976
山科	134098	4672	1976



<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000015607.html>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/京都市>

編集人

京都の散歩道 (2) 愛宕山と比叡山

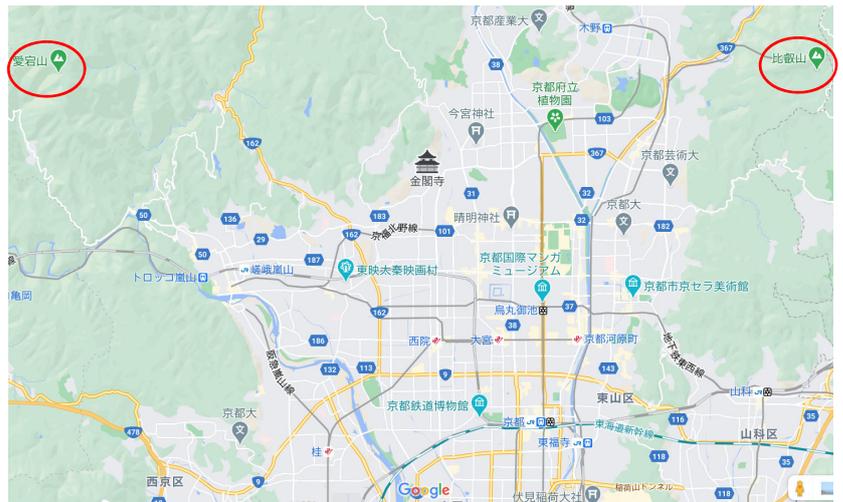
先月は左京区北端の三国岳を話題にしましたので、今月はその延長で山について取り上げたいと思います。

京都の人にとってまず思い浮かぶ山といえば、西の愛宕山(924m)と東の比叡山(848m)でしょう。特に、愛宕山は京都市で一番高いと思っておられる方も少なくないようですが、高さでは皆子山(971m)、峰床山(970m)、地蔵山(948m)の次です。なお、比叡山については

「厳密に言えば、比叡山という山はない。北から水井山(みずいやま、七百九十四メートル)、横高山(よこたかやま、七百六十七メートル)、三石岳(さんごくだけ、六百七十五メートル)、大比叡(おおびえ、八百四十八メートル)、四明岳(しめいがたけ、八百三十五メートル)の総称である。一番高いのはその名の通り大比叡。しかし、これは京都側からは同じ峰続きなので、手前の四明岳の陰になって見えない。だから、京都で比叡山といえは四明岳ということになっている。市内あちこちの見る位置によっててっぺんの形がちがうのは、この大比叡と四明岳の重なり具合が原因なのだ。」(倉部きよたか、『京都人は日本一薄情か』、文春新書、2005、p.81)

とのことです。

地図で見ると愛宕山と比叡山は岩倉の京都国際会館とほとんど同じ緯度で西東に並んでいることも分かります。何かと対比される愛宕山と比叡山については、京都で育った子どもなら一度ならず聞かされる昔話があるそうですね。



「幼い頃に祖母がこんな話を聞かせてくれたことがある。昔、愛宕山と比叡山が背比べをした。結果は愛宕山の方が少しだけ背が高かった。悔しがった比叡山が愛宕山を殴った。しかし振り下ろしたゲンコツが一番高いところから少しだけ逸れてしまった。その結果、愛宕山には窪みができたが、背比べでは比叡山が負けてしまったという。これは京都の町の東西に聳える比叡山と愛宕山との関係を知る上で示唆に富んだ昔話である。話の背後には、比叡山延暦寺と愛宕修験との競い合いが秘められているのだろうか。」(鵜飼均編著、『愛宕山と愛宕詣り』、京都愛宕研究会、2004、pp.4-5)

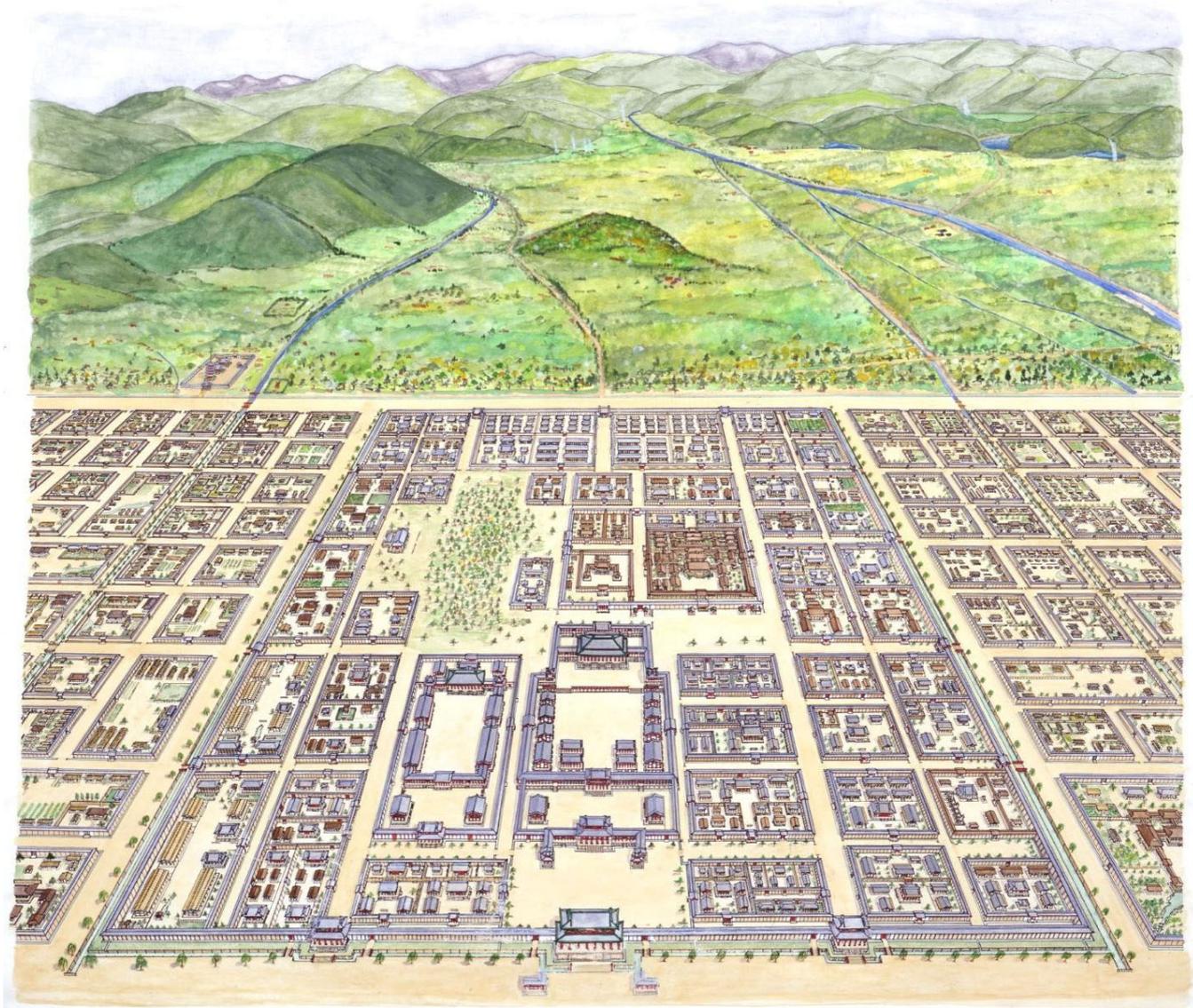
「愛宕山の祭神は中世に入ると、後の縁起にあるような具体的な名を持つ祭神となってあらわれるようになる。(中略)このように、呪詛や恨みといった怪しさをもって愛宕山や天狗が語られていることが注目される。ここから考えられることは、当時の愛宕山が、中央ではなく少し異端の位置付けであったことである。現任京都でよく語られる、愛宕山と比叡山が喧嘩して、比叡山が叩いて愛宕山のこぶができたという話は、比叡山と愛宕山の権力闘争、更に言えば愛宕山が敗れたことを示唆するとも考えられる。」(同、pp.24-25)

編集人

京都の散歩道 (3) 平安京

残念ながら今年も葵祭(賀茂祭)は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止(葵祭行列保存会と葵祭行列協賛会が3月15日に発表)。緊急事態宣言(東京・大阪・兵庫・京都 2021年4月25日—5月11日: 政府は5月5日現在で延長検討中)直後でもあります。平安時代、「祭」といえば賀茂祭のことだったそうですので、今月はせめて平安京の姿を想像してみたいと思います。

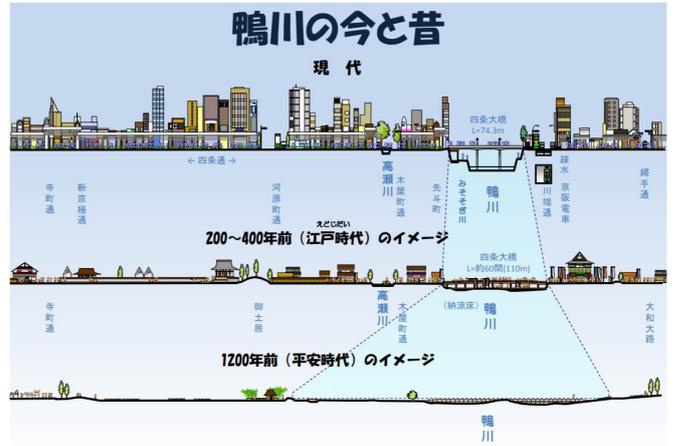
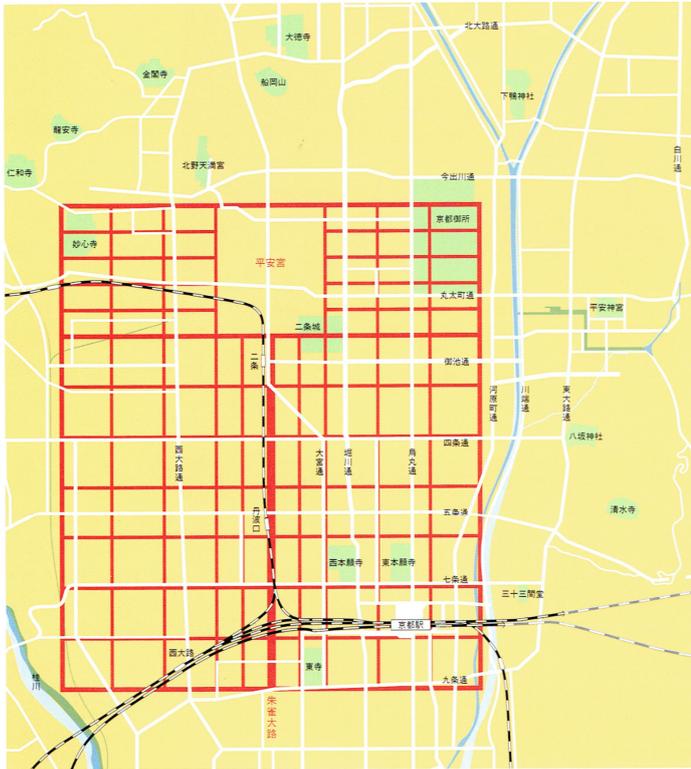
京都市が1994年に平安建都1200年記念として編集発行した「甦る平安京」は、ひとたびページを開くや、尽きない魅力に引き込まれる美しく貴重な本で、元京都市埋蔵文化センター・京都市考古資料館第9代館長の梶川敏夫氏による美しい図や文章も含まれています。



平安宮復元図(「甦る平安京」京都市編集・発行(1994)、pp.10-11 図版1より: 梶川敏夫氏のご許可をいただいて掲載)

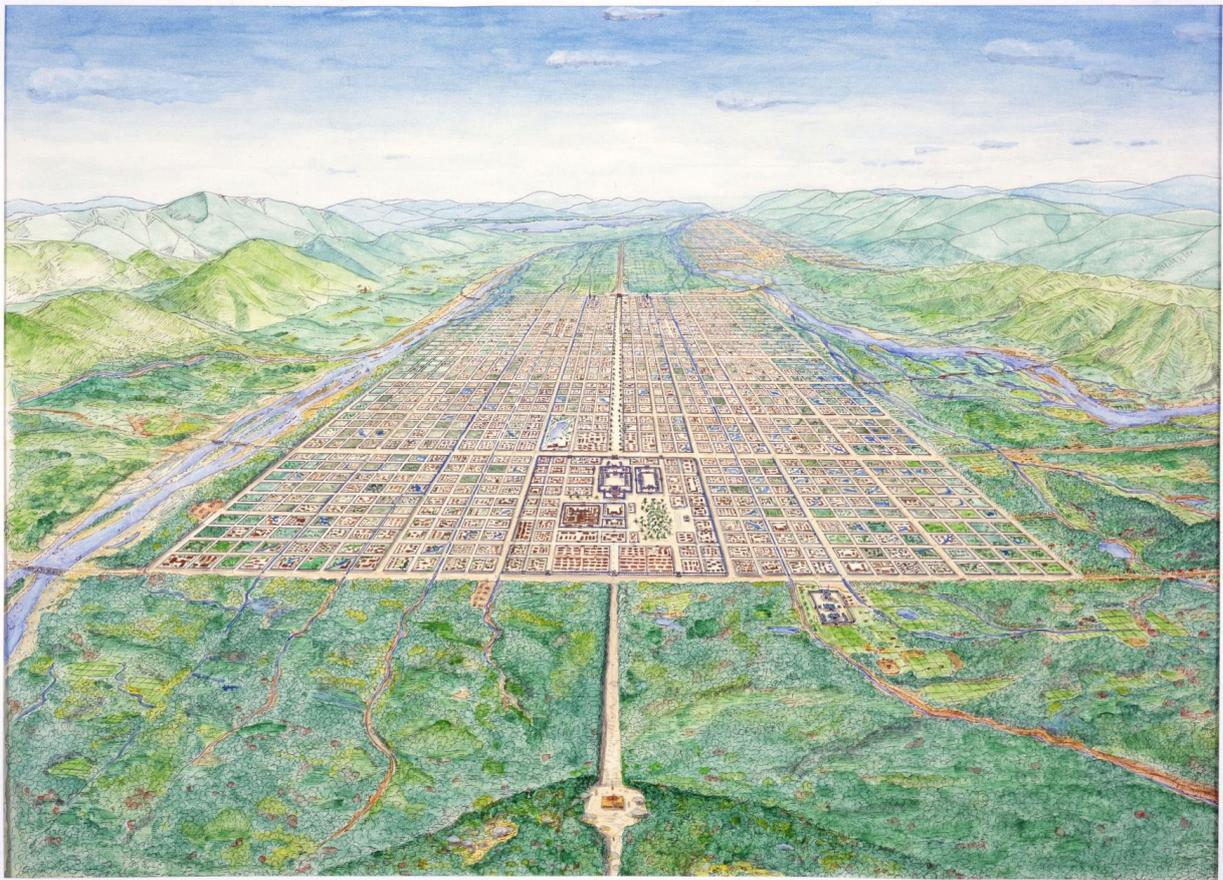
同書には次ページのように現在の京都市地図に平安京を重ねた図も示されています(p.80)。現在の千本通り(二条以南)が朱雀大路ですので、現在の“京極”が京の東端であったことはよく理解できますね。当時の東京極大路は寺町通(寺町京極)に対応するそうです。

なお、白河法皇(1053 – 1129)が天下三不如意と嘆いた「賀茂川の水、双六の賽、山法師」の鴨川については、京都土木事務所による「鴨川の河川整備工事について」に下図のような興味深い情報があることを付記します。



<http://www.pref.kyoto.jp/kyotodoboku/documents/kamoseibi-1.pdf>

それでは「天子／君子は南面す」(https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000090295)——前頁と同じく梶川氏による図で平安京を北方から眺めていただき、新型コロナウイルスの早期収束を祈りましょう。



北方から俯瞰した平安京（「よみがえる古代京都の風景—復元イラストから見る古代の京都—」三星商事印刷(2016)、p.19 図版9より：梶川敏夫氏のご許可をいただいて掲載） 編集人

京都の散歩道 (4) 本能寺の変——明智軍の進軍ルート

日本歴史上の最大の謎とも称される“本能寺の変”は、天正10年6月2日（1582年6月21日）未明の出来事でした。中国地方の「毛利氏の軍勢と対峙する羽柴秀吉に加勢するため、わずかな近習を連れ京都・本能寺に滞在していた織田信長を、おなじく中国攻めに加わるために大軍を率いて本拠地・丹波亀山を發した明智光秀が急襲し、信長と嫡男・信忠を殺害」⁽¹⁾しました。光秀の動機には諸説あって議論が続いていますので素人が立ち入ることは避け、ここでは明智軍の進軍ルートだけを話題にします。なお進軍前の5月28日、光秀が愛宕山に登り「時(土岐)は今、雨(天)が下しる(命令)五月かな」と揺れる心を詠んだことも有名ですね。



光秀が本能寺に向かったのは上図で赤く示した山陰道に沿ってです。ただし、「古代山陰道のコースについて実ははっきりしない。平安京羅城門を起点として大繩手を西行して桂川を横断、檜原、大枝、王子（亀岡市）に至っ」⁽²⁾たとのこと。明智軍は本来中国攻めなら沓掛から南進するところを東進しました。山陰道は、桂駅から京大桂キャンパスに向かうバス路線と2回交差します。当時は桂川に橋もかかっておらず、有名な「敵は本能寺にあり」という言葉はこの桂川で発せられたと、頼山陽の『日本外史』にあるそうです⁽³⁾。桂川を越えて東側は平安京の区画も残っていたかもしれませんが、図中で点線表示した直線路は根拠に欠けるのではないかと思います。なお、現在の本能寺は三条河原町のバス停そばにあるので誤解しがちですが、当時は四条堀川の少し北東側（中京区元本能寺南町）にありました。最後に、本件に関連して楽しめる記事⁽⁴⁾や映像⁽⁵⁾を付記します。

(1) 週刊新発見！日本の歴史、1号（朝日新聞出版2013年6月11日）

(2) <https://ja.wikipedia.org/wiki/山陰道>

(3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/本能寺の変>

(4) 6月2日は「本能寺の変」明智光秀の進軍ルートをたどる 記者3人で夜通し25キロ、
<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/257341>

(5) 【車載動画】京都古道7 旧山陰道【千本七条～亀岡】
https://www.youtube.com/watch?v=1qZEeXa_q_Q&t=143s

京都の散歩道 (5) 祇園祭と貞観時代

400年近い平安時代の前半200年の天皇(在位期間、足掛年数)を調べてみました。

50代 桓武(781-806、25)、**51代** 平城(806-809、3)、**52代** 嵯峨(809-823、14)

53代 淳和(823-833、10)、**54代** 仁明(833-850、17)、**55代** 文徳(850-858、8)

56代 清和(858-876、18)、**57代** 陽成(876-884、8)

下線の清和天皇が在位したのが貞観時代(859-877)で、畑中章宏氏⁽¹⁾によりますと

「平安時代になると、疫病の流行は無実の罪を着せられて亡くなった御霊(ごりょう)によるものだと考えられるようになる。疫病に対して、人びとは御霊を鎮め災厄を祓うための仏事をおこない、また歌舞や騎射、相撲、走馬(はしりうま)などを催した。こうした御霊鎮めは畿内から諸国にも広がった。貞観5年(863年)の春、「咳逆病(しわぶきやみ)」が流行り、多くの人びとが倒れたため、朝廷は「神泉苑」で国家的な「御霊会」を初めて開いた。神泉苑には早良(さわら)親王、伊予親王など六柱の御霊の霊座が設けられ、經典の演述や、雅楽の演奏、稚児の舞などが奉納された。なお御霊会のきっかけになった咳逆病は、現代のインフルエンザだった可能性が高いとされている。(p.12)」

貞観時代は疫病だけでなく、天変地異

- ・ 864年(貞観6年)富士山大噴火：延暦大噴火(800)や宝永大噴火(1707)とともに3大噴火の1つ
- ・ 869年(貞観11年)貞観地震

も畳みかけました。最近10年の間に東日本大震災と新型コロナウイルスに見舞われた現在とも重なります。

「その後も、富士山の噴火や貞観大地震などの大災害が襲ったことから、貞観11年(869年)6月14日に、当時の国の数である66本の鉾を造り、祇園社(八坂神社の前身)から神泉苑に神輿を送る「祇園御霊会」が催され、災厄の除去を祈った。この祇園御霊会が「祇園祭」の起源だとされている。(p.26)⁽¹⁾」

疫病を鎮めるための祇園祭が新型コロナウイルスにより中止になるのは、まったく残念かつ皮肉なものです。

(1) 畑中章宏、日本疫病図説、笠間書院、2021。

(2) RIKOH プリントアウトファクトリー <https://www.printout.jp/CL/GRH/RE/020/CL-GRH-RE-020.html>



(2)

祇園大明神 「諸宗仏像図彙3」より元禄3年(1690年)

インド祇園精舎の守護神とされる牛頭天王は、平安京・祇園社の祭神で、「祇園天神」とも呼ばれた。古代神話のスサノヲノミコトと習合して各地の天王社に祀られ、薬師如来を本地仏とした。(1)

付記：今回、疫病に関する本をいくつか読んでみましたが、なかでも山本太郎「疫病と人類」、朝日新書(2020)は深みがあって感銘深い本ですね。まず、山本さんご自身が素晴らしい方だと思いました。

編集人

京都の散歩道 (6) 国際日本文化研究センター データベース



今月は、やはり「五山送り火」に関して散歩を試みようと、関連の本をあれこれや調べておりました。しかし、その結果判明したのは、これだけ京都市民のみならず日本中に知れ渡った行事でありながら、その起源、つまりwhenも、whoも、whyもよく分からないとのこと。このため、これ以上調べてみるのは諦めたのですが、文献を調べているうちに、国際日本文化研究センター（日文研）に、興味深いデータベースが公開されていることに、遅ればせながら気付いたので。

なお、京大桂キャンパスに向けて京阪京都交通の赤いバス（桂駅西口からは20・20B系統、京都駅前からは21・21A系統）に乗ると、9号線から曲がって山道を登り始める榎原嶋谷（かたぎはらしぎたに）手前で「南極観測隊料理長のお店レストラン“赤おに”・・・花の舞公園前で」とアナウンスのある例の「日文研」です。

特に筆者が関心をもったデータベースを以下に列挙します。

- ・ 平安京都名所図会 <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/meisyozyue.html>
- 『都名所図会』 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/kyoto/c-pg1.html>
- 『拾遺都名所図会』 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/kyotosyui/c-pg2.html>
- 『都林泉名勝図会』 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/rinsen/c-pg3.html>
- 『花洛名勝図会』 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/karaku/c-pg4.html>
- 『花洛細見図』
- 『都名所画譜』 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/gafu/c-pg6.html>
- 『京都名所順覧記』
- 『京都名所撮影』 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/satsuei/c-pg8.html>
- ・ 都年中行事画帖 <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/gyouji.html>
- ・ 吉田初三郎式鳥瞰図データベース <https://iiif.nichibun.ac.jp/YSD/>
- ・ 古写真 <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/oldp.html>
- ・ 和歌 <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/waka.html>

なお、

- ・ 艶本資料 <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/enbon.html> は要申請（汗）

編集人

京都の散歩道 (7)「竹取物語」と八幡竹



今月は表紙に写真を載せた「中秋の名月」にちなんで、「竹取物語」と「竹」を話題にします。まず、近刊でスザンヌ・ルーカスさんの面白い本⁽¹⁾を見つけました：著者は

World Bamboo Organization (<https://worldbamboo.net/>) のExecutive Directorで、「竹がかかわる物語のなかでもっとも有名なのが、日本の『竹取物語』だろう。10世紀頃に成立し、現存する日本最古の物語とされるこの説話は、竹のなかから見つかった不思議な少女の生涯を題材にしている。(p.116)」と紹介しています。「竹取物語」は、日本が世界に誇ることができる昔話のようです。

そこで、何十年かぶりに「竹取物語」⁽²⁾を読んでみました。「そうか、最後は帝までがプロポーズしたのか」と思い出すと同時に、日本人とりわけ京都人と関わりの深い竹に思いが移りました。竹に関する本を検索すると、古くは京大教授だった故上田弘一郎(1898-1991)先生の本⁽³⁾⁽⁴⁾、新しくは大阪市大教授だった内村悦三(1932-、やはり京大農学部出身)先生の本などに多数行き当たります。文献⁽³⁾によりますと、身長3寸=約9cmのかぐや姫が入っていた竹は「マダケ」だそうです(今日一般に見られる「モウソウチク」は中国から1730年代に伝わったので該当しないとのこと、pp.86-91)。一方、かぐや姫の里はどこでしょうか？ 文献⁽⁴⁾によりますと、一説には西京区大原野竹林、もう一説には富士市中比奈だそうです(pp.77-88)。とはいっても、帝からのプロポーズの一件を含め、京都人としては前者を取りたい気持ちです。

竹と言えば、京都人なら思い浮かぶもう一つのことにはエジソンでしょう。石清水八幡宮の竹(八幡竹)をエジソンが白熱電球のフィラメントに採用したということは右図⁽⁵⁾のサイトなどにも説明されていますが、今回、前述のルーカスさんの文献⁽¹⁾中に比較的詳しい説明を見つけたのと、男山エジソン頌徳保存会の貴重な資料⁽⁶⁾を国会図書館で入手できたのとで、長文になりますがご紹介します。以下の本文は前者⁽¹⁾からの引用、脚注は後者⁽⁶⁾に基づく補足です。



<http://www.iwashimizu.or.jp/story/kj.php?seq=14&category=0>

「竹はその独自の細胞構造により、ほかの重要な用途にも利用されている。たとえば、最初に特許が取得された電球は、竹の炭化フィラメントを使っていた。長持ちする炭素フィラメント電球を開発し、近代史の方向を大きく変えた人物こそ、アメリカの有名な発明家トーマス・エジソンである。エジソンは1879年、32歳のときに、タールとすすを塗った炭化綿フィラメントを使い、白熱電球の製造に成

功した。だがこれは、45時間しかもたなかった。600時間以上もたなければ売り物にはならない。そう考えたエジソンは、世界各地からフィラメントに使えるような素材を6000種以上集め、その有効性をひとつひとつテストしていった。そんなある日、研究室にいた東洋好きの男が持ってきた竹の繊維を試してみたところ、そのフィラメントは200時間もった。そこでエジソンは、竹のテストを集中的に行おうと考え、世界中の竹を取り寄せることにした¹。電球のフィラメントに最適の竹を求め、20人以上の研究者がさまざまな国に派遣された。そのために10万ドルを超える費用が投じられたという。19世紀末の当時としてはかなりの額である。

1880年、エジソンのもとで働く研究者のひとり、ウィリアム・H・ムーアが日本にやって来た。当時の首相伊藤博文と外務大臣山縣有朋に面会し、京都へ行けばいい竹があるかもしれないとの情報を得たムーアは、早速京都へ向かい²、明治新政府の約2代京都府知事榎村正直に話を聞いた。すると、嵯峨野や八幡の竹が電球のフィラメントに適しているかもしれないという。

実際、八幡で採取したマダケ（学名 *phyllostachys bambusoides*）製のフィラメントで電球をつくると、2450時間ももちこたえた。エジソンは、エジソン・ゼネラル・エレクトリック・カンパニーを設立して八幡の竹³を使った電球の製造に乗りだし、10年余りにわたり世界中にこの電球を輸出した（1894年により耐久力のあるセルロース製フィラメントの電球が開発され、竹の炭化フィラメントの時代は終わった）。その功績により、日本ではエジソンは「発明王」として知られ、石清水八幡宮がある男山の山頂にはエジソンの記念碑が設置されている。（pp.96-97）」

参考文献

- (1) Susanne Lucas(スザンヌ・ルーカス)、竹の文化誌、原書房、(2021)
- (2) 長尾剛、竹取物語 すらすら読める日本の古典<原文付き>、汐文社(2018)
- (3) 上田弘一郎、竹と日本人、NHKブックス、(1979)
- (4) 上田弘一郎、竹づくし文化考、京都新聞社、(1986)
- (5) <http://www.iwashimizu.or.jp/story/kj.php?seq=15&category=0>
- (6) 立下三郎、Thomas A. Edison and Japanese Bamboo、(1989)、非売品。
男山エジソン頌徳保存会(現京都男山エジソン協会：事務局は京阪・石清水八幡宮駅前カフェ・キャンドル、立本信氏)

編集人

¹ エジソンは細かく指示しています：①肥料の施していない竹 ②8年から10年経た竹 ③秋10月から12月に収穫したもの ④根から1m上部12節を取る ⑤節と節の間隔は35cmから40cmのもの ⑥竹の内側の柔らかい部分をはがし ⑦1cmの幅にして100本の束にまとめて

² 東海道線の新橋駅—神戸駅間が全通したのは1889年なので、1880年夏にムーアは船で横浜から神戸に移動したようです。神戸のアメリカ領事館を訪れる途中、街の扇子屋に飛び込み「この扇子はどこで作っているか」と聞くと「京都、三条の宮脇賣扇庵 <http://baisenan.co.jp/>」とのことだったので、京都に着くや宮脇賣扇庵を訪れたものの英語が通じません。そこで、知事の榎村正直が仲介に入ったのがきっかけのようです。

³ 正確には、現在の嵯峨野から大山崎にかけての竹藪と、八幡市から京田辺市普賢寺(同志社大の南端付近)にかけての竹藪から集められたそうです。

京都の散歩道 (8) 出版社

読書の秋ですので今月は本の話題を。「李承晩」と「蒋介石」をまとめて宇治**三色アイス**のようなタイトルとした珍しい本を図書館で借りてみた（目次だけ確認したら、結局つまらなそうでした）ところ、奥付（右図）からなんとあの三一書房は、元は京都の出版社だったんだと気付きました¹。そういえばいかにも京都らしい雰囲気だなあと。そこで同社のホームページ<https://31shobo.com/> を見てみると

李承晩・蒋介石	定価 150 円
1960年8月6日 第一版発行	
著者 © 中川信夫	1960年
発行者 田畑弘	
印刷所 誠和印刷株式会社	
製本所 本間製本株式会社	
発行所 株式会社 三一書房	
京都市左京区北白川西平井町24 電話京都 (7) 3101, 3885 番 振替京都 6403 番 東京都千代田区飯田町2の14 電話東京 (331) 9393, 5657 番 振替東京 84160 番	
落丁・乱丁本はおとりかえいたします	三一新書 252

1945年10月 京都（京都市左京区**吉田泉殿町1-1**）にて創業。1947年 東京出張所を設置（千代田区神田神保町1-14）。1949年 京都社屋移転（京都市左京区**北白川西平井町24**）。1957年 東京出張所移転（千代田飯田橋2-14）。1961年 東京本社（千代田区神田駿河台2-9）を新築。京都本社、飯田橋出張所を合併移転。

とありました。同社の原点となった**吉田泉殿町1-1**は、百万遍のマクドナルド付近（西側）です²。京大構内にある京都大学学術出版会 <https://www.kyoto-up.or.jp/> や吉岡書店（後述）の次に近い出版社だったんですね。そこで、思いつくままで申し訳ありませんが、京都に拠点をおく馴染み（名前をよく目にする）の出版社を調べてみました（<https://www.books.gr.jp/publisher.html>）。

- ・化学同人 <https://www.kagakudojin.co.jp/> 化学の殿堂、敬礼！
- ・かもがわ出版 <http://www.kamogawa.co.jp/> 加藤周一さんのイメージが強いですね。
- ・現代数学社 <https://www.gensu.jp/> 山本義隆さんの「熱学思想の史的展開」は稀代の名著です。
- ・思文閣出版 <https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/> 百万遍でよく見ますが本の方は・・・
- ・人文書院 <http://www.jimbunshoin.co.jp/> 「東京出版文化圏の渦から少し身を離して、日本有数の文化都市であり学術都市である京都の洛南伏見の地にて（HPより）」いい言葉ですね！
- ・数研出版 <https://www.chart.co.jp/> 高校でチャート式にはお世話になりました。
- ・（世界思想社）教学社 <https://ss-kg.jp/> 大学受験用の永遠のベストセラー？赤本。
- ・淡交社 <https://www.tankosha.co.jp/> 「君子之交淡若水」に由来する格調高さ。筆者には無縁。
- ・PHP研究所 <https://www.php.co.jp/> 新書はこの10月で創刊25周年。もうすぐNo.1300です。
- ・光村推古書院 <http://www.mitsumura-suiko.co.jp/> 京都に関する魅力的な本がいっぱい。
- ・ミネルヴァ書房 <https://www.minervashobo.co.jp/> ヘーゲルの『法哲学』序文にある「ミネルヴァのふくろう」からだそうです。ああむずかし。
- ・吉岡書店 <http://www.yoshiokasyoten.sakura.ne.jp/> 古くさく質実剛健ですが物理の名著群。

編集人

¹ 井家上(いけがみ)隆幸「三一新書の時代」論創社(2014)によると、同志社大出身の田畑弘と竹村一が創業。百万遍の古本屋「三一書店」（朴元俊店主は「三・一運動」にちなんで命名）の2階から始まったので、それにあやかって三一書房となったそうです。話題となった本に、「人間の条件」（五味川純平）、「愛のコリーダ」（大島渚）、「検定不合格日本史」（家永三郎）など。

² マクドナルド東側の旧レブン書房 <http://www.kyoto-up.org/archives/1617> ではありません。

京都の散歩道 (9) 泰斗による中国歴史研究

今月も読書の秋にちなんで、京大が誇る東洋史学の泰斗、宮崎市定(1901-95)先生と貝塚茂樹(1904-87)先生の名著にスポットライトを当ててみたいと思います。お二人とも「京都支那学」と称された内藤湖南(1866-1934)先生や桑原隲蔵(じつぞう)先生(1871-1931)の最後の弟子にあたります。といっても、筆者自身、せっかく京大に長年いたのに宮崎・貝塚両先生の畢生の研究成果も知らないようではもったいない、恥ずかしいと、今秋遅ればせながら読んだに過ぎないことを白状します。また、中国と台湾そして米国を含めた国際関係が過去になく緊張している今日、その原点に遡ってみるよい機会であると考えたことも読む動機となりました。なお、発行年は以下のようで、両書とも1966年の文化大革命から少し経過したところまでが記述されています。

◆宮崎市定：中国史

岩波全書(上 1977、下 1978) → 岩波文庫(上・下 2015)

◆貝塚茂樹：中国の歴史

岩波新書(上 1964、中 1969、下 1970) → 著作集第八巻、中央公論社(1976)

(なお、現在は岩波新書のKindle版だけが新規入手できますが、古書入手あるいは図書館利用の際は、中央公論社合冊版の方が断然読みやすくお勧めです。)



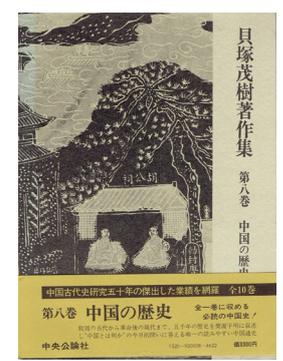
まずは、より大部で多数の図・表・写真や索引も完備している貝塚先生の方から読んでみました。はしがきでは「単に断代史をつなぎ合わせただけで通史はでき上らない。断代史をこえた視点が必要であるからである。それはときに中国をこえて、アジア全体、さらに人類史一般の立場からながめることも必要とする。」、第八巻あとがきでは「通史の記述の困難は何を書くかでなく、何を書かずにすますか、その選択にあると思われる。」と述べておられます。記述は極めて整然として明確で体系的、かつ本文より少し小さめの字で随所に挿入された詳細な項目説明により理解が一層促進されます。この大著から適切にポイントを抽出するのは筆者には不可能ですが、いちばん印象に残ったのは「第一次大戦中の日本の二十一カ条要求を中心とする弾圧政策がもとになって、日中戦争までエスカレートしてきた。二十一カ条を強制した失策の責任はいくら責めても責めたりない。」という強い主張です。



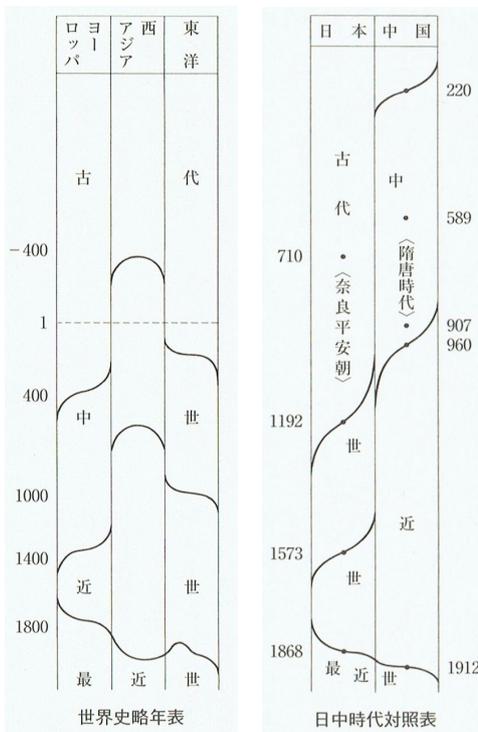
宮崎市定



貝塚茂樹



貝塚先生の本の読了後、直ちに宮崎先生の本に移りました。この順番は正しかったと思います。というのも宮崎先生の本は極めて個性的で、上巻などは、先生が75歳だった1976年9月1日から毎日5枚とノルマを定めて90日で一気に完成に書き上げられた（下巻の解説で引用された1977年1月発行「日本読書新聞」より）ことから理解できるように勢いがあり、体系的に学ぶ教科書のように構成されていないからです。1977年6月に書かれたはしがきには「ここ数十年は学生を持たないから、従って講義したこともない。（中略）私はこの書の読者を、私の学生に見立てて、学生の前で久しぶりに講義するつもりで筆を執ることにした。（中略）私は将来ある若い世代を相手に学問を語りたく思う。」と何とも熱いのです。前出の日本読書新聞には「最初に案を立てる時、有益な本にしようか、それとも読み易い本にしようかと迷った。有益な本とは、学校の副読本などに指定され、授業の進行にあわせて、しづしづ読まされる本のことである。読み易い本とは、歴史学に直接関係しない人でも、大した苦痛を伴わずに、一週間位で読破できそうな本のことを言う。全書本という外形からすると、書店にとっては前者の方が為になるかも知れないが、まかり間違っても受験の参考書にでも利用されると心外でもあり、後者の方に定めた。」ともあります。一方、むすびには「私はこの書を書くに当って、既存の概説書、またはこれに類するものは、他人のものも、また自分のものも、成るべく見ないように心掛けた。（中略）私はなるべく私の記憶だけに頼って、この書中に書きこむ題材を選んだ。もし私の記憶から全く忘れ去ってしまったような事実ならば、それは忘れられるだけの価値しかない事実だ、と判断する自信が私にはある。」とのことです。すごい自信と気迫です。



内容について少しだけ紹介します。「常に世界史を念頭におき、世界史的立場から、最も具体的に個別の歴史研究に取組む用意が必要だ」という主張は貝塚先生と軌を一にします。そして、「時間と空間が織り成す座標軸の広さ」を問題とし、先生が考案された略年表が左図です。古代、中世、近世、最近世の四分法に基づき、時間差を伴って世界全体が関連していて、さらに中国と日本の関係だけに注目すると、近世に入るまでは中国が先行したものの最近世では逆転したことを示しています。先生は、ソルボンヌ大学、ハーバード大学、ハンブルク大学、ルール大学に客員教授としても招聘され、正に世界的な視点で東洋史学に関する研究を深められたといえます。



両書刊行後半世紀近く経った今日、アメリカと中国を中心とする世界展開となりました。両書から学んだ視点で考えなおしてみたいと思います。 編集人

京都の散歩道 (10) 桑原武夫先生たちによるフランス革命研究

先月は京大の東洋史学を話題にした以上、今月は京大のフランス研究を話題にせずにはいられないと思います。まずは、以下に①～④の名著・名訳書と、それらの著者・訳者の写真を並べてみます。



桑原武夫
(1904-1988)



河野健二
(1916-1996)



上山春平
(1921-2012)



樋口謹一
(1924-2004)



多(夢)田道太郎
(1924-2007)

以上の写真は、『京大広報』 <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/196363>
341号(1987.11) 506号(1996.10) 681号(2012.9) 587号(2004.2) 631号(2008.2)
(桑原先生は文化勲章受章記事、他は訃報)からです。一方、執筆当時の写真も『世界の歴史10』と『世界の名著37』(中央公論社)の創刊時付録より入手できましたので、25～50年程度の差があってもどちらも貴重と思い以下に掲載します。(ご尊顔の変化もさることながらメガネの流行変化も顕著です。)



①桑原・河野・上山・樋口：『フランス革命とナポレオン』

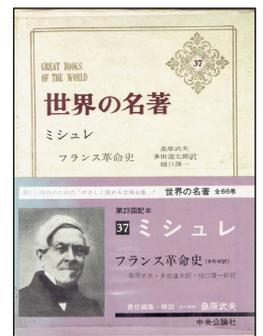
世界の歴史10、中央公論社(1961) → 中公文庫(1975) [オリジナル版と文庫版のページ割は全く同一で、両者とも索引がないのは惜しいですが、文庫版には年表が追加されています]

②J. ミシュレ：『フランス革命史』

＜訳：桑原・多田・樋口＞

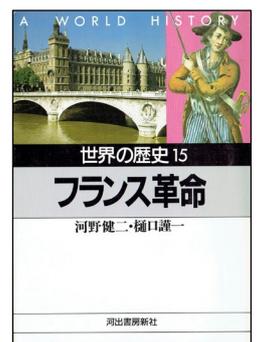
世界の名著37、中央公論社(1968) → 中公バックス(1979)

→ 中公文庫 上下(2006) [オリジナル版の付録には桑原先生と司馬遼太郎(1923-1996)氏の対談がありますが、一方、文庫版には小倉孝誠氏の32ページに及ぶ解説があります。文庫本は現在も新規入手可能です。]



③河野・樋口：『フランス革命』

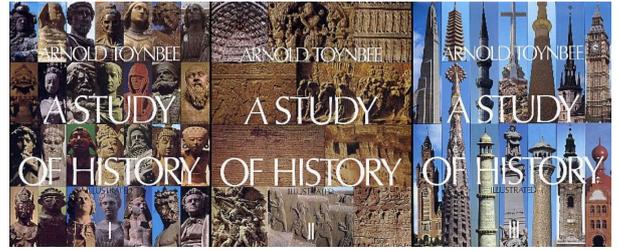
世界の歴史15、河出書房新社(1969) → 河出文庫(1989) [オリジナル版と文庫版のページ割は全く同一で、前半が河野先生で後半が樋口先生。オリジナル版には合計24ページのカラー写真が挿入されていますが文庫本にはありません。しかし、索引は文庫版の方が拡充されています。現在はKindle版が入手できます。]



④A・トインビー:『図説 歴史の研究』

＜訳: 桑原・樋口・橋本・多田＞

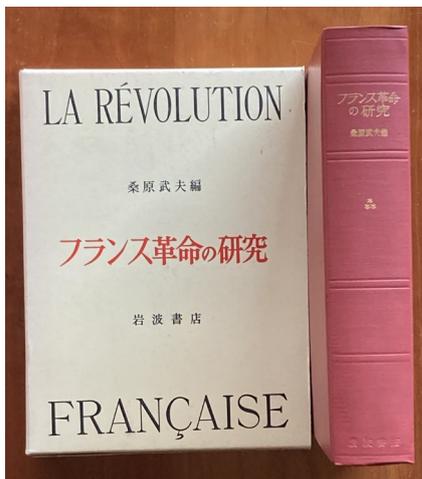
学研(1976)〔1冊版と3分冊版があります。いずれも3kg以上ある大きく重い本です。なお、新たに第3訳者の橋本峰雄先生(1924-1984: 写真入手できず)は京大哲学科出身ですが、神戸大教授にして鹿ヶ谷にある法然院の第30代貫主だったとのこと。〕



桑原武夫先生については、京機会ニュースNo.43、pp.16-17(2021年10月)の拙記事 <https://keikikai.jp/wp-content/uploads/2021/10/newsNo.43.pdf> でも少し触れました。今から70年以上も前のことなので若い方はご存じないかもしれませんが、フランス文学を専門とする桑原先生が1948年に東北大から京大人文学研究所(本ニュースレター口絵は分館)に戻られて以降、多彩な研究者で構成する学際共同研究システム〔ルソー研究(1951)、フランス百科全書の研究(1954)、フランス革命の研究(1959)(後述の①)、ブルジョワ革命の比較研究(1964)、中江兆民の研究(1966)、文学理論の研究(1967)、ルソー研究第2版(1968)〕を推進するとともに多くの弟子を育てられたことは京大の輝かしい歴史の中でも特筆されることです。そこで今回は、とりわけ若い方に向けて、世界史の中でも極めて重要かつ興味深いフランス革命に関する桑原先生たちの著作を紹介したいと思います。これらは60年から45年前の本ですが、決して古さを感じさせない名著(名訳)中の名著(名訳)であると思います。前掲書①について、フランス革命に関して多数の著作のある安達正勝(1944-、京大の仲間内ではなく東大出身)氏の『物語フランス革命』(中公新書、2008)の文献案内でも「桑原武夫編『フランス革命とナポレオン』中公文庫(世界の歴史10) この本は、ごく一部、日付や人名表記等の間違いがあるが、日本語で書かれたフランス革命史の中でもっともすぐれていると私は思う。」と第一に挙げています。



ここで、前述の学際共同研究システムの成果の一つであり、前掲書①の元となった①桑原武夫編:『フランス革命の研究』、岩波書店(1959)を紹介します。



共同研究参加者											
京都大学人文科学研究所											
京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部	京都大学文学部
中川久	田村静	吉田静	芝田静	樋口美都	森口美都	豊田美都	前川貞次	飛鳥井雅道	山田喜	藤岡喜	牧岡喜
多田道太郎	上野春平	河野健二	井上清	今西錦司	桑原武夫						

これは、1953.11～1958.6の4年半ほどの間に、上記のようにさまざまな分野の18人の研究者が124回の研究会を開いた成果をまとめたものです。その「はしがき」で、以下のように述べておられるのは重要と思います。「かつて『ルソー研究』を公けにしたとき、イデオロギーを異にする人びとの集まった共同研究の弱味ということが指摘された。たしかにあの研究には思想の一貫性がとぼしく、その批判は正当であった。ただ、さまざまの考え方をもち人びとの協力は、基本的な点について的一致があるかぎり(たとえば、フランス革命についてテーヌ¹的見解をとるものの皆無)、特定の一(“1”の漢数字)イデオロギー(長音符)にたつ人びとの集まりよりも、自由発想の幅と量が多く、そのシゲキが生産性を高める利点のあることに評者は気づいていなかった。私たちは三つの共同研究を重ねるうちに、協力者のうちにおのれの基本線をすてた転向ではなく、相違の中の接近ともいべき空気が生まれたことを、この上なき幸福とし、またいささか誇りと思うものである。」



筆者は、①は文庫版発行当時から目を通しておりましたが、その著者4人中の2人が8年後に上梓された③の方は最近気付いたに過ぎません。さらに、今回の記事をまとめるに際し前述の①に加え②と④を確認しないのは方手落ちと思い、急遽“日本の古本屋”経由で古書を購入しました。特に、②のミシュレの書は、桑原先生が「本書はそのフランス革命を最も生き生きと伝える名作であるが、同時に、歴史叙述の模範として推奨する価値がある」と絶賛しておられ、いうまでもなく①や③のバックグラウンドの一つともなっています。なお、ミシュレの浩瀚な原著11巻を『世界の名著』全集の規格(550ページ)に収めるため「若干の重要な章は全訳し、その他の章は7ポ活字(注:文庫版では10級)を用いて要約するが、そのさいも、特色的な個所は8ポ活字(注:文庫版では12.5級)で直訳すること」で約5分の1に圧縮されています。全編にわたり印象深く、とりわけロベスピエールの最後(かつ全編の最後)は劇的です。また、1789年10月5日、数千のおかみさんたちが「パンをよこせ！」と叫びながら国王(ルイ16世)と議会に要求してパリからヴェルサイユに行進し、王室をパリにつれてゆくのでなければ承知しないといって夜を徹して座り込んだ結果、やむなく王室は承諾し翌6日午後パリのチュイルリー宮殿に向けて行進する個所で、「十月六日の革命、必要で正当な革命[そうしたものがあるとしてのことだが]、まったく自発的で予想外で、真に人民的なこの革命は、とりわけ女性の行なった革命であった。七月十四日の革命が男性の革命であったように。男はバスチーユを奪い、女は王を奪った。」と表現することも筆者には印象的でした。

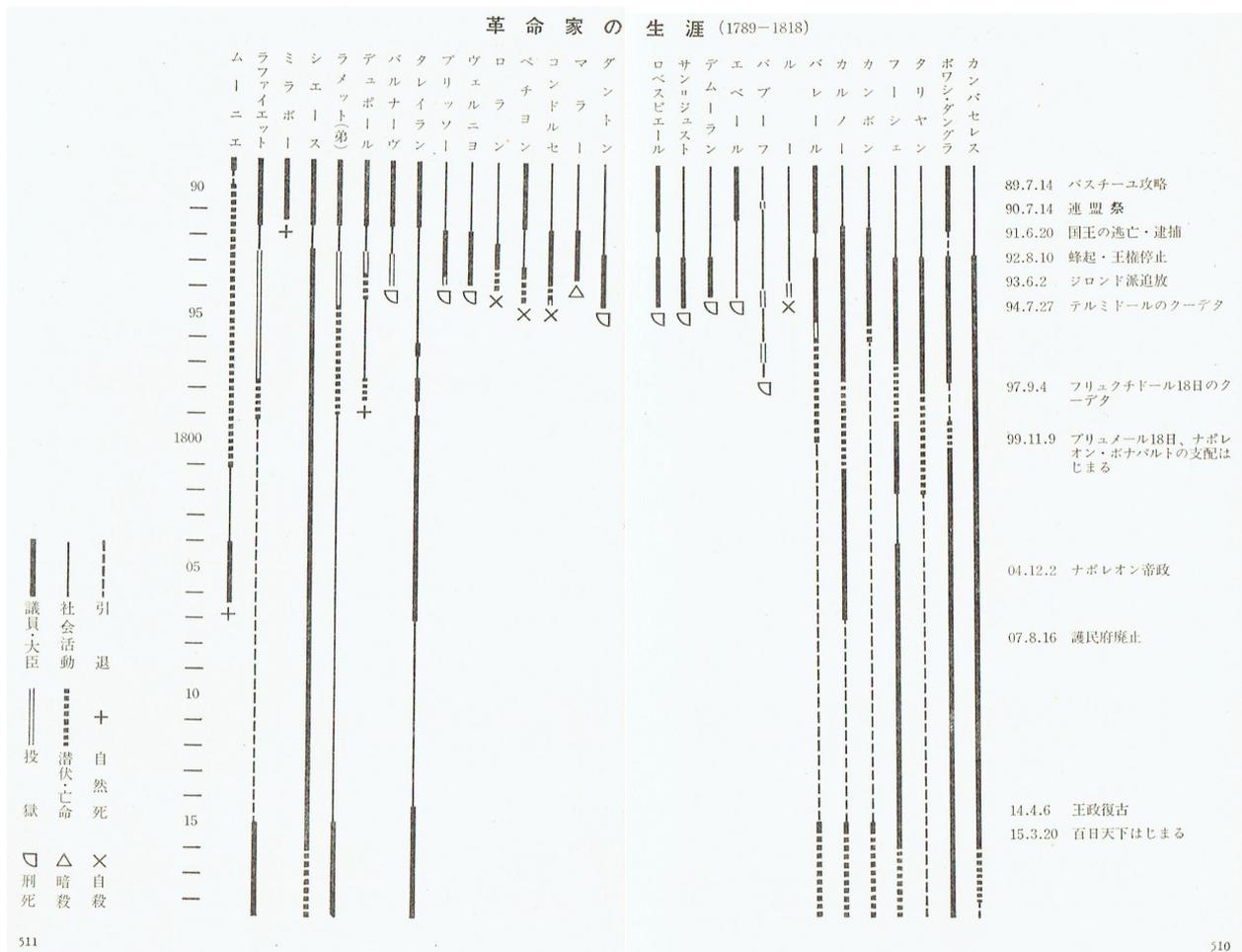
以下の「革命家の生涯」の棒グラフ図は、共同研究報告書①の中で作成され、いくぶん省略された図は③にも掲載されていますが、7年後に②の補足資料として再掲されたものです。これは、フランス革命を演じた主要人物の視点から激動の30年間をおおまかに一望できる貴重な図ですが、革命の展開は極めて複雑です。

¹イポリット・テーヌ(1828-1893)

熱工学を専門とする筆者の立場からは、熱力学第2法則の礎を築いたサジ・カルノー（1796-1832）の父ラザール・カルノー（1753-1823、「organisateur de la Victoire」 「勝利の組織者」と呼ばれました）が軍人および数学者・工学者としてフランス革命の中で活躍するのが印象的です（③には索引もあるので、カルノーの活躍が極めて多岐にわたっていることが容易に確認できます）。



ラザール・カルノー サジ・カルノー



以上、紙面の制約以前に筆者の力では桑原先生たちの大研究を的確に要約してご紹介するのは難しいですが、多少なりともご参考になれば幸いです。なお、次ページ以降には本稿の付録として

『桑原武夫集』（全10巻、岩波書店（1980～1981）：年代順編集）

『桑原武夫全集』（全8巻、朝日新聞社（1968～1972）：テーマ別編集）

の総目次、さらに文藝春秋誌での記事一覧を追加します。

また、松尾尊兌（たかよし：1929-2014）先生の

『滝川事件』、VI-四 ある日の桑原武夫先生、pp.366-375 岩波現代文庫（2005）にも興味深い記述があることを付記します。

『桑原武夫集』全10巻、岩波書店（1980～1981）総目次（編集人作成）

1 1930～1945

尾上郷川と中ノ川
スタンダールの芸術について
積雪期の白根三山
スタンダール
虚子の散文
服装と行為
山岳紀行文について
あの頃のこと
小説の読者
富岡鉄斎展を見て
能郷白山と温見
湖南先生
『遠野物語』から
パリの公園
ファーブル博物館
ブルターニュ紀行
パリ大学開講式
文学的フランス
アラン訪問記
パリの本屋など
早春日記
ドイツ紀行
ラシーヌへの道
ニームの闘牛
美術品の防衛
山遊び
慰戯としての文学
『古代弁自序』を読んで
鈴鹿紀行
キーツの墓
フーレ先生
コンパニョナージュ
アメリカ大陸
黒人街
モンテーニュの城
スタンダール遺跡めぐり
政治遊戯
芸術家の実生活と作品
戦時下の登山
鳥の死なんとする
展墓
詩人
二十年前の三好達治君
歴史と小説
登山の文化史
『クレヴの奥方』について
『三国志』のために
ざくろの花
書物について
五十マルク札
外国文学研究の反省
ヴァレリの『スタンダール論』
現代フランス・ヒューマニズム
町一番の風呂

西田先生の一面

2 1946～1950

趣味判断
文学修業
日本現代小説の弱点
断想
ものいいについて
フランスの一左翼作家
ブルデル雑記
文芸俗話
西洋文学研究における孤立化について
アランの政治思想
第二芸術
三好達治君への手紙
短歌の運命
洞察について
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン
横光利一氏の『秋の日』
芭蕉について
パリの下宿
マルロー研究
ずり落ち
反訳について
文学における伝統
地方文化私見
織田作之助君のこと
フランス文学におけるドイツの影響
君山先生
やむを得ぬ滅亡
スタンダールの世界文学賞
エコール・サントラル精神
仙台を去るにあたって
歴史と文学
『イタリア絵画史』のスタンダール
レーヴィットの『ヨーロッパのニヒリズム』
戦後の宮本百合子
伝承問答
高原の幸福
法隆寺の壁画
平和の発見
文学者と酒
人間認識
フランス的ということ
書評のない国
人間の戦い
素朴ヒューマニズム
読みそこない
文学批評について

3 1950～1953

文学入門
鷗外と不俗

宛名のない手紙
ジッドの死をきいて
私の読書遍歴
『ルソー研究』序言
ルソーの文学
伝統
北海道断想
鷗外の『高瀬舟』そのほか
ヘミングウェイ『武器よさらば』
あくまで平和を
西洋文学研究者の自戒的反省
人間性の試金石
今日における歌舞伎
読書
漢文必修などと
文化遺産のうけつぎ
丁玲における尖鋭さ
アラン
南方熊楠の学風
予想あそび
日本映画の成長
杜甫の『贈衛八処士』について
パスカルの時計のパンセの解釈
『魯迅評論集』を読んで
みんなの日本語
家元制についての私的感想
外国人を招くことについて
伊東静雄の詩
三好達治の『測量船』について
文学とはなにか

4 1954～1956

考古遊記
アマクチの流行
榊亮三郎先生のこと
平和運動と誓い
文学批評と価値判断
『百科全書』の芸術論
啄木の日記
『七人の侍』
旧友の文章
日本知性への注文
敗戦前後
自己解説
学問を支えるもの
しろうと農村見学
河上肇『自叙伝』
トルストイ『戦争と平和』入門
『近松物語』の感動
ソ連の宗教
アルメニア紀行
ショーロホフ五十の賀
ソ連・中国の乾燥性

社会主義国の女性雑感
四川紀行
日本文化論のあり方
明治の再評価
博雅の士貝塚茂樹
漢の高祖の『大風歌』について
歴史における人間の尊重
恐怖政治の大天使・サン＝ジュスト
幼いころの絵本
森外三郎先生のこと

5 1957～1959

ニアリング夫妻との一タ
ノーマン博士の思い出
『大菩薩峠』
西堀南極越冬隊長
日本的とはなにか
芸術の社会的効果
郭沫若氏の一面
『明治天皇と日露大戦争』
国際ペン大会の印象
伝統と近代化
『揚州八怪』から
河野学派の落第生
第一級の文化論
美人観を調査する
国文学のあり方
チョゴリザ登頂
現代日本における古典のあり方
科学技術時代と古典の運命
フランス・ナショナリズムの展開

6 1959～1964

研究者と実践者
日本の教育者
叱るといふこと
ケンソン
眠り上手
一九六〇年論壇時評（十二篇）
日本は小国ではない
ひとはいさ
宇宙時代と古典
人を知る明のない先輩
伊勢神宮の国有化
私のノンフィクション
ジャワの十日間
安保阻止運動
青年の冒険精神
永井荷風
ショーロホフ『静かなドン』
中野重治をめぐる雑談
ナショナリズム論について
日本文化の考え方
日本文化雑感

仲間の結合
存在としてのインド
大正五十年
インド史学界の新巨星
ローマ字新聞
シンポジウムに招かれての感想
緑のしげみ
柳田さんの一面
ルソー思想の世界への浸透
パワー・ポリティックス
アフリカひとのぞき
松本清張の文学
インド・ネパールの旅
現在も生きる心情
狩野先生逸事
後進国問題の考え方
おやじ
ベンガルの槍騎兵
錬金術師の早技

7 1965~1969

近代日本における歴史学
ある明治のナショナリスト
萩原朔太郎の庭見物
憲法第一章についての感想
ふたたび江刈村へ
ベトナムについての感想
和魂洋才の変転
人間兆民
ふるさとを行く
心の痕跡
今西錦司論序説
名を知っているということ
東北の可能性
明治百年を迎えて
こころづくし
小島祐馬先生を偲ぶ
『桂春団治』序にかえて
近代化における先進と後進
文学価値論
人民史家ミシュレ
私のなかの中国

ヨーロッパと日本
人文科学における共同研究
読書家と観察者
仙台の五年間
中天に輝く天体
桑原隲蔵小伝
父の手帳
トレギエから
トレギエの二週間
現代社会における芸術
日本の百科全書家新井白石

8 1969~1974

思い出すこと忘れえぬ人
ブータン入国記
一致と影響
『中央公論』創刊一〇〇〇号を迎えて
流行言
ヨーロッパ文明と日本
奇人
駒井能登守のために
林達夫について
カタカナの氾濫
昔話
人間性について
三上章を惜しむ
書についての雑談
夢
川端康成氏との一タ
大事件にひもをつけよ
松本清張の処女作
平和の条件としての文化
大学生と俳句
世界の日本学
明治革命と日本の近代
石油の国
モスクワとバクー
ヨーロッパの出かせぎ労働
志賀高原と三好達治
志賀さんの思い出
好きなことば
奈良時代の志賀さん

永井荷風の生活と芸術
鉄斎の芸術

9 1974~1977

論語
現代日本文明について
本当の政治論
今西錦司について
ニーダム博士と私
中江兆民の洞察
おのずと
丸山薫弔辞
シルクロードの旅から
元号について
トルコの印象
トインビー『図説歴史の研究』について・,
日本論壇の弱点
町的美観は誰のものか
現代本文明について
文学における悪
柳田国男『遠野物語・山の人生』解説
内藤湖南『日本文化史研究』解説
壮絶な準備
青果雑感
西洋音楽と中国・日本
天下の大勢
達人マルローについて
知的関心としての民俗学
私の敦賀
左派の長者
都のかたち
竹内さんと私

10 1977~1980

懐しい土居先生
三つの挿話
日本のフランス文学研究にのぞむ
紀元二〇〇〇の挑戦
未見の知己

ヨーロッパの印象
兆民への接近
インディオの山高帽子
中国について
年の初めの願いごと
宇野久夫『髪形の知性』序にかえて
半世紀の思い出
別荘
ルソーの魅力
歴史と人間
工業化時代におけるクラフト
加藤周一氏をめぐる断片語
内発的文化の知的創造性について
甘くない国際理解をゼイタクということ
八木一夫弔辞
虚子についての断片二つ
名和君の酒,
国際ペン大会に参加して
「文化力」ということ
富士正晴の詩
追憶
風俗学とその周辺
国際コミュニケーションと日本文化
弔カイヨフ
朝永さんのこと
吉川君のこと
文章作法
高仙芝について
木村さん
甲信越と私
中国に父をしのぶ
着任
文字村疎開記
自由・平等・友愛と現代世界
推薦文（四十四篇）

『桑原武夫全集』全8巻、朝日新聞社（1968~1972）総目次（編集人作成）

第1巻

文学とはなにか
文学入門
小説の読者
慰戯としての文学
芸術家の実生活と作品
孤独について
日本現代小説の弱点
文学批評について
文学批評と価値判断
芸術の社会的効果
ヘミングウェイ『武器よさ

らば』
ショーロホフ『静かなドン』
トルストイ『戦争と平和』入門
漢の高祖の『大風歌』について
杜甫の『贈衛八處士』について
鷗外と不俗
石川啄木
啄木の日記
永井荷風

戦後の宮本百合子
三好達治君への手紙
三好達治の『測量船』について
伊東静雄の詩

第2巻

文学的フランス
フランス的ということ
現代フランス・ヒューマニズム
ラシーヌへの道

パスカルの時計のパンセの一解釈
『クレヴの奥方』について
スタンダールの芸術について
スタンダール
『イタリア絵画史』のスタンダール
ヴァレリの『スタンダール論』
中天に輝く球体

アラン
アランの政治思想
ジッドの死をきいて
フランスの一左翼作家
マルロー研究
フランス文学におけるドイツの影響
西洋文学研究における孤立化について
西洋文学研究者の自戒的反省
コンパニョナージュ
政治遊戯
フランスの室内遊戯
(フランス・)ナショナリズムの展開

第3巻

ひとはいさ
洞察について
第二芸術
芭蕉について
短歌の運命
文学修業
文芸俗話
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン
横光利一氏の『秋の日』
文学者と酒
美術随想
なぜ小説を読まないか
今日における歌舞伎
家元制についての私的感想
富岡鉄斎展を見て
『遠野物語』から
『三国志』のために
南方熊楠の学風
『大菩薩峠』
『揚州八怪』から
劇場での感想
映画論(六篇)
ものいいについて
むつかしすぎる
反訳について
漢文必修などと
むつかしい文章
みんなの日本語
国文学のあり方
宇宙時代と古典
ローマ字新聞
伝承問答
文化遺産のうけつぎ
伝統
伝統と近代化
日本文化の考え方
日本文化雑感
歴史と小説
伝統と民族性
文学における伝統
歴史と文学
国民文学論について
歴史における人間の尊重

近代日本における歴史学

第4巻

人間認識
湖南先生
君山先生
狩野先生逸事
森外三郎先生のこと
西田先生の一面
榊亮三郎先生のこと
柳田さんの一面
ある明治のナショナリスト
河上肇『自叙伝』
『桂春団治』序にかえて
詩人
萩原朔太郎の庭見物
二十年前の三好達治君
錬金術師の早技
中野重治をめぐる雑談
今西錦司論序説
西堀南極越冬隊長
旧友の文章
博雅の土貝塚茂樹
ベンガルの槍騎兵
やむを得ぬ滅亡
織田作之助君のこと
人を知る明のない先輩
アラン訪問記
フーレ先生
ニアリング夫妻との一タ
郭沫若氏の一面
ノーマン博士の思い出
恐怖政治の大天使・サン＝ジュスト
ざくろの花
書物について
展墓
町一番の風呂
車中にて
仙台を去るにあたって
高原の幸福
私の行楽
月のことば
叱るということ
ケンソン
眠り上手
心の痕跡
趣味判断
アマクチの流行
美人観を調査する
研究者と実践者
日本の教育者
科学振興と国語問題
科学技術時代と古典の運命
日本学術会議のために
大学における自由の考え方
『ルソー研究』序言
人文科学における共同研究
桑原隲蔵小伝
おやじ
こころづくし
私のうけた家庭教育

幼いころの絵本
一度もない転機
河野学派の落第生
仲間的結合
初期の文章三篇
自己解説

第5巻

鳥の死なんとする
断想
文学雑誌のあり方
角帽
法隆寺の壁画
平和の発見
引揚げ
或る小事件
人間の戦い
素朴ヒューマニズム
宛名のない手紙
私はユートピアなどいらない
あくまで平和を
外国人のいうこと
人間性の試金石
講和を祝う歌について
日本インテリの弱さ
ナショナリズムと文化
予想あそび
外国人を招くことについて
思想の自由と伝統
鴨東線は早くつくるがよい
付記 鴨東線とは、現在、大阪から三条まで来ている京阪電車線を北へ出町柳まで延長して、叡山電車と連絡せしめようとするもので、京都市会では数年来の懸案となっていた。この公聴会后、開設案が可決された。(編集人注:「現在」とは、本書発行時の1969年1月のこと)
雲の中を歩んではならない
平和についての架空座談会
平和運動と誓い
日本知性への注文
敗戦前後
学問を支えるもの
明治の再評価
日本文化論のあり方
教養主義のゆくえ
革命と伝統
にぎやかな日本
身から出たサビ
日本的とはなにか
進歩的ということ
時のながれ
ヒューマニズムを使ってみて
私たちの憲法
一九六〇年論壇時評(十二篇)

日本は小国ではない
伊勢神宮の国有化
安保阻止運動
青年の冒険精神
低姿勢と高姿勢
ナショナリズム論について
大正五十年
パワー・ポリチ(ティ)ックス
鉛色の空の下での断想
論争について
多数人口と日本文化
見物人の感想
憲法第一章についての感想
ベトナムについての感想
万国博基本理念
市民から市民への訴え
和魂洋才の変転
明治百年を迎えて
むりな注文かもしれぬが
西洋崇拝からの脱却

第6巻

緑のしげみ
早春日記
パリの下宿
パリの公園
パリの本屋など
ファール博物館
パリ大学開講式
スタンダール遺跡めぐり
モンテーニュの城
ニームの闘牛
ブルターニュ紀行
ドイツ紀行
五十マルク札
キーツの墓
アメリカ上陸
黒人街
私のみたアメリカ市民
訪米雑感
モスクワ第一信
日本語のできるロシア人
ソ連の中学
ショーロホフ五十の賀
ソ連における文学研究についての感想
アルメニア紀行
中国の言語政策
人民解放軍歌劇団
新中国の見方について
四川紀行
私のなかの中国
生産文化と消費文化
社会主義国の女性雑感
ソ連・中国の乾燥性
共産主義国をどう見るか
ジャワの十日間
インド・ネパールの旅
インド史学界の新巨星
存在としてのインド
アフリカひとのぞき

国際学生セミナーに参加して
国際ペン大会の印象
後進国問題の考え方
近代化における先進と後進
ヨーロッパと日本

第7巻

登山の文化史
積雪期の白根三山
能郷白山と温見
鈴鹿紀行
尾上郷川と中ノ川
服装と行為
あの頃のこと
山遊び
ずり落ち
なつかしさ
山岳紀行文について
チゴリザ登頂
地方文化私見
北海道断想

しろうと農村見学
ふたたび江刈村へ
東北の可能性
考史遊記
ふるさとを行く
読書
読みそこない
書評のない国
読書家と観察者
松本清張の文学
司馬文学について
書評九篇
すいせん文十六篇
自著はしがき・あとがき集

補巻

現代社会における芸術
新井白石の先駆性
日本の百科全書家新井白石
人民史家ミシュレ
今日の世界
林達夫について

駒井能登守のために
松本清張の処女作
人間性について
平和の条件としての文化
父の手帳
小島祐馬先生をしのぶ
追想——矢野仁一先生のこ
と
風神奔放
高橋和巳への弔辞
奇人
三上章を惜しむ
川端康成氏との一タ
夢
昔話
トレギエの二週間
ブータン入国記
ブータン国連加盟
名を知っているということ
緑陰読書
(『中央公論』)創刊一〇〇
〇号を迎えて

流行言
歴史のこまやかな味
カタカナの氾濫
幸福狩り
書についての雑談
大事件にひもをつけよ
すいせん文十篇
思い出すこと忘れえぬ人
虚子の散文
戦時下の登山
ブルデル雑記
スタンダールの世界文学賞
エコール・サントラル精神
ソ連の宗教
現代日本における古典のあり方
シンポジウムに招かれての感想

『文藝春秋』に収録された記事一覧

(『桑原武夫集』や『桑原武夫全集』と一部重複)

町一番の風呂(1944.11)
或る小事件(1949.9)
文學の害毒について(1951.3)
南方熊楠の學風(1952.12)
みんなの日本語(1953.4)
忘れられぬ學者(1954.4)
京都學派罷り通る〔鼎談:末川博(1892-1977)・恒藤恭(つねとう きょう、1888-1967)〕(1954.6)
何れが是か非か(1954.10)
あるソ連邦の共和國(1955.8)
自由過剰の國・日本〔対談:中谷宇吉郎〕(1956.8)
よき時代のよき教育者(1956.12)
西堀南極越冬隊長(1957.6)
揚州八怪から(1958.1)
「花塚の峰」の貧乏隊長(1958.11)
大正五十年(1962.2)
中江兆民(1964.8)
借金の名人・三好達治(1964.10)
大学入試は改革できる(1966.3)
まごころ(1967.2)

明治は日本のルネッサンス〔対談:松本清張〕(1968.11)
思い出すこと忘れえぬ人(1969.1)
港町での少年時代(1969.2)
錦林小学校時代(1969.3)
小島塾の二階の六畳(1969.4)
伯父さん列伝(1969.5)
不幸な友人たち(1969.6)
しらくもとグループ旅行(1970.1)
古風な恩師たち(1970.2)
濫読の楽しみ(1970.3)
思い出の“にわか”師たち(1970.4)
北海道の山旅(1970.5)
あこがれの少女たち(1970.6)
“人工日本語”の功罪について〔対談:司馬遼太郎〕(1971.3)
ブータン国連加盟(1972.2)
川端さんはこんな人だった(1972.6)
壮絶な準備(1976.11)

グラビア記事:日本の顔(1967.2)
グラビア記事:娘と私(1971.12)

余談ながら、『文藝春秋七十年史〔資料編〕(1994、全510ページ)』が1923~1991年の総目次です(非売品ですが“amazon”や“日本の古書店”などで入手可能で、2024年には同様に『百年史』が出ると予想されます)。総目次を眺めていると、1945年4~9月は戦争のため休刊、さらに1947年2月号は用紙難のため休刊という事実気付きました。また、1946年2・3月と4・5月はそれぞれ合併号になっています。当時の状況が伺われます。

編集人

京都の散歩道 (11) 井上靖さんと朝比奈隆さん—文学と音楽の巨匠

新年の散歩道は、文学と音楽の巨匠から始めましょう。われらが京大の大先輩という親しみを込めたいので、敬語は用いないものの敬称略とはせず、井上靖(1907–1991.1.29)さんと朝比奈隆(1908–2001.12.29)さんと呼ばせていただきます。命日までわざわざ記したのは、井上さんは昨年1月末で没後30年、朝比奈さんは昨年末でちょうど没後20年というタイミングであったことをお知らせするためです。

井上さんは1932年(24歳)に九州帝大を中退して京都帝大文学部哲学科に入学、1936年(28歳)に卒業しました。一方の朝比奈さんは1928年(19歳)に京都帝大法学部に入学して1931年(22歳)に卒業。高等文官試験(高文)に落ちて阪神急行電鉄(現阪急電鉄)に就職するも、1933年(24歳)に文学部哲学科に学士入学して1937年(28歳)に卒業。二人とも回り道の多い学生時代で、同時期に京都帝大に在籍しました。その二人が、それぞれ文学と音楽の道を究めて1976年(69歳)と1994年(86歳)に文化勲章に輝くのですから、われわれ京大関係者にとっては嬉しく誇らしい限りです。

筆者は学生時代、まず『あすなる物語』で井上さんに接して感動し、続いて日本あるいは中国の歴史物に進みました。しかし読んだ本はそれほど多くはないので、井上さんについてここで詳述することもできず、先日近所の図書館で29巻からなる井上靖全集(新潮社、1995–2000、文末の総目次ご参照)¹を見て、ただただ圧倒されたことだけお伝えします。なお、井上さんが毎日新聞社、松本清張(1909–1992)さんが朝日新聞社、司馬遼太郎(1923–1996)さんが産経新聞社と、昭和を代表する文豪がいずれも新聞社勤務を経て大きな仕事をされたことを興味深く思います。

一方、朝比奈さんは大阪フィルハーモニー交響楽団などと『ベートーヴェン交響曲全集』を7回録音(世界記録)、その初回(1973)と最終回(2000)の全集を筆者は愛聴しています(正直なところ、ブルックナーは時間が長くてなかなかじっくり聴く余裕もないことも加わり、筆者には難しいです)。朝比奈さんと同年生まれのカラヤン(1908–1989)さんとは対極にあるような「愚直」(ご当人の好きな言葉)な演奏に感動します。なお、朝比奈さん自身による多数の本から一冊を選ぶと『楽は堂に満ちて』⁽¹⁾。一方、第三者による密度の高いものを厳選しますと、響敏也さん⁽²⁾、木之下晃⁽³⁾さん、岩野裕一⁽⁴⁾さん、中丸美繪⁽⁵⁾さんの本がお薦めです(大阪フィルについては渡辺佐⁽⁶⁾さんの本も)。朝比奈さんの場合、まず東京高等学校²第一期生としての人脈がその後の展開に大いにプラスしたことが印象的ですが、もちろん京都帝大や関西での新たな人脈も劣らず重要です。以下は井上さんとの接点分かる貴重な小文です。

¹ 井上靖記念文化財団理事長の井上修一氏から伺った話では、井上さんの全作品を収めるには、さらに16巻必要なので、多くの作品が井上靖小説全集(全32巻、新潮社、1972–75)の方にのみ収められているそうです。

² 1921年創立で1950年まで存続した官立の七年制高校。実質的に東京帝大にもつながっており、1950年代末における卒業生の活躍に対し大宅壮一さんが「ジュラルミン高校」と呼びました。文藝春秋1965年5月号の『同級生交歓』には、朝比奈さんの他、内田藤雄(ピアニスト内田光子さんの父)、篠島秀雄、清水幾多郎、出淵国保、日向芳齊、平井富三郎、宮城音弥の各氏が集合しています。

朝比奈隆氏と私 井上靖

私は昭和七年から十一年まで、京都大学文学部に籍を置いていた。専攻は美学であったが、学校には全然出なかったの、同じ専攻の学生の殆どを知らなかった。卒業前年の秋、何かの用事で主任教授の植田寿蔵（編集人注：1886-1973）博士にお目にかかりに研究室へ出向いて行ったら、あなたが井上君かと言われた。そしてあなたと同じようにいっこうに学校に顔を現わさないのがもう一人居ると、先生は付け加えられた。朝比奈隆氏であった。

しかし、朝比奈隆氏はその頃既に大学では有名であった。大学のオーケストラの指揮者として、氏の名前は、音楽とは無縁であった私もまた知っていた。

私は卒業を一年おくらせたので、京都大学には四年間籍を置いたことになるが、その四年間に、一度だけ朝比奈氏と言葉を交したことがある。卒業論文を文学部の事務室に提出しに赴いた時、やはり卒業論文を持って来た朝比奈氏と、事務室の窓口でお会いしたのである。昭和十一年の二月の初めだったと思う。

その日、二人は二十分ほど大学附近の道を歩いた。下宿でも同じ方面にあったのかも知れない。朝比奈氏は、あなたですか、井上さんという人はと、植田先生と同じようなことを言われた。そして、お互いに一回の講義も聴かないで卒業するということが虫がよすぎますよと、そんなことを言って、笑った。その時、大学附近の喫茶店へでもはいったのではなかったかと思うが、確かなことは憶えていない。ただ一つ、その日のことで憶えていることは、一体音楽とは何か、指揮するとは何かと、甚だ第一義的なことを質問したかったのであるが、結局はそれを口に出さなかったことである。

その春、私はどうにか大学を卒業させて貰ったが、朝比奈氏が卒業したかどうかは知らない。氏は論文をひっこめるか何かして、もう一年おくれられたのではなかったかと思う。

数年前、「文藝春秋」誌上に「同級生交歓」という写真を載せるために、東京のどこかで氏とお会いしたことがある。大学卒業以来初めてであり、まさに同級生交歓であった（編集人注：後で転載する文藝春秋の記事から、正しくは「数年前」ではなく「十一年前」で、場所は「日比谷公会堂」です）。

その折、私は話題を音楽の方に持って行きかけて、途中で思い返して、話を他に移してしまった。若い時でさえ保留した質問を、今更どうして再びとり上げる必要があるか、そんな気持がどこかにあった。

それ以来、今日まで、氏とはお会いしていない。私は氏の仕事がいかなるものか、新聞や雑誌で承知しているし、氏の指揮する交響楽団の演奏を、聴衆の一人として聴いてもいる。派手な舞台上の氏を遠くから見ていて、あそこに朝比奈隆が居ると思う。同じように氏もまた、小説家としての私の文章を眼にする機会を一回や二回は持っているのではないかと思う。大学の同級生ではあるが、そしてお互いに芸術、文学の仕事に携っているのであるが、二人の関係は甚だ疎遠と言う他はない。

疎遠という言葉は使ったが、他に適当な言葉がないから、この言葉に代行して貰ったわけであるが、実は、私の氏に対するものは、決して表面的意味での疎遠と言えるようなものではないのである。と同様に、おそらく氏の私に対するものも同じことではないかと思うのである。若い日、あの自己表現を摸索している、明るくも暗くもある特殊な時期に、そして朝比奈氏にとっても、私にとっても、おそらく生涯で最も大切であったに違いない時期に、たとい短い時間でも、京都の町を肩を並べて歩いた者同士が、どうして相手に疎遠であることができるであろうか。

疎遠でなかったからこそ、私は数（編集人注：十一）年前にお会いした時にも、音楽について何も質問しなかったのである。この次お目にかかっても、やはり音楽についての質問は保留することになるのではないかと思う。

音楽というものは、指揮するということは、一体何ですか。もし私が質問したら、氏もまた私に質問するかも知れない。文学とは、小説とは、詩とは、そしてそうしたものを書くということは、一体何ですか、と。

考えてみると、若い日に交すべきであった言葉を、そして若い日であつたら交してもおかしくなかった言葉を、そして交さないより交しておいた方がよかったに違いない言葉を、私たちは交していないのである。私たちは、音楽家としても、文学者としても、まだお互いに名乗りをあげていないのである。

この小文を綴りながら、一度ゆっくりと氏にお目にかかりたい気持がしきりである。いつか京都大学の事務室の前でお目にかかってから三十数年経っている。当時大学の主任教授であった植田寿蔵博士は現在九十歳近い高齢であるが、今なおご健在である。博士は私のこの文章を読まれたら、音楽とか、文学とか、そんなものは判りはしませんよ。判ったら芸術家でも、文学者でもないでしょう。昔、一度も教室に顔を見せなかった二人の弟子に対する労わりの気持をこめて、博士は優しくこうおっしゃりそうな気がする。

朝比奈隆、『ベートーヴェン交響曲全集』学研(1973)や再版版ナクソス(2013)のライナーノート、あるいは『井上靖全集別巻』、pp.369-371、新潮社(2000)より。井上修一氏のご許可を得て全文を転載。なお、朝比奈隆、『この響きの中に 私 の音楽・酒・人生』、実業之日本社(2000)の序文としても再掲されており巻末の初出一覧では(1978)となっていますが、正しくは学研から最初にレコードが販売された(1973)です。

話が前後しますが、朝比奈さんが大阪フィルハーモニー交響楽団を日本屈指の楽団に育て上げた背景には、幾多の偶然も重なっています。そもそも東京育ちの朝比奈さんが東京高校から京都帝大に進学したのは、東京帝大入試に失敗したのが発端ですが、加えて当時東京高校に送られてきた京大新聞の記事が決定打となりました。京大音楽部(1916年誕生)が新交響楽団(のちのNHK交響楽団)にも登場したロシアのエマヌエル・メッテル(1878-1941)氏を、大村恕三郎、深瀬周一、瀬戸口藤吉の各氏に続く第4代の常任指揮者としているとの記事を見て、かつ黄金時代の法学部——憲法は佐々木惣一(1878-1965)教授、民法は末川博(1892-1977)教授、刑法は滝川幸辰(1891-1962)教授に学べるということで、迷うことなく京都帝大をめざしたそうです。

朝比奈さんが阪神急行電鉄に就職したのは、朝比奈さんの複雑な出自と関係しています⁽⁵⁾。朝比奈さんの実父 渡邊嘉一(1858-1932)氏は「日本土木史の父」と呼ばれ、全国の電気鉄道会社などの経営に参画したほか、関西瓦斯社長、東京月島鉄工所社長、東洋電機製造社長、東京石川島造船所(現IHI)社長、第7代帝国鉄道協会会長などを歴任した大人物、さらに、生後まもなく養子としてもらった先の養父 朝比奈林之助(1869-1923)氏は鉄道院理事であったため、高文に落ちて鉄道省への入省が叶わなかった朝比奈さんは関係深い鉄道会社に勤めることになりました。そこで、電車の運転手、踏み切り番、盗電の査察、さらに阪急デパートでの販売員などを経験しましたが、2年後京大に学士入学したのち退社します。朝比奈さんは以下のように語っています。

よく皆さんが音楽に対する情熱とか、どうしてもやりたくてたまらないからと。そんなんじゃないけど、まあ好きは好きだったんでしょうね。大学を卒業して就職して、阪急をやめた時点ですることがなくなったんですよ。やめ方が非常に抽象的で、けんかしたわけでもクビになったわけでもない。いまだに会社に入ったりして遊んでますからね。大学にでも籍をおかないと会社をやめさせてくれそうもない。

文学部へ戻って、ほかに空きがなかったので哲学科へ入っちゃった。大学へ行ってみたら井上君がいる。お前もか、ってわけですよ。彼は放浪の青年、哲学なんか毛頭やる気がなくて。ぼくはOBで京大オーケストラのヴァイオリンを弾いてた。指揮者がメッテル先生。その影響が大きいですな。

『朝比奈隆のすべて 指揮生活60年の軌跡』、芸術現代社(1997) p.123より

朝比奈さんのその後も波瀾万丈で興味深いですが、「京機短信」中の記事ということで、京大関係の話題に焦点を当てて締めくくらせていただきます。前述の井上さんの文章から、[文藝春秋1962年12月号の『同級生交歓』](#)が見つかりましたので、文藝春秋社のご許可をいただいて、貴重な写真と文章を転載します。(なお、文藝春秋の「日本の顔」の欄には、井上さんと朝比奈さんが、それぞれ1970年8月と1979年6月に取り上げられてもいます。)



左から朝比奈さん、井上さん、古谷さん

毎日新聞論説委員 古谷 綱正
 作家 井上 靖
 指揮者 朝比奈 隆

私たちは同級生らしい 無責任ないい方だが 学生時代は三人ともおたがいに顔を知らなかった そのころ（昭和八年）の京大文学部美学専攻は 一学級六 七人のはずだから われながらあきれた話である 朝比奈君は当時すでに音楽学校の教師もしていたためだし 私は芝居のまねごとにつつつを抜かしていた 井上君はただ怠けたのだというが サンデー毎日の懸賞小説で千円せしめたりしているから そっちの方が忙しかったのかもしれない 朝比奈君が 知らない人に話しかけられ それが試験を受かったばかりの講師だったり 井上君が 三年のとき主任教授の植田寿蔵先生に初対面のあいさつをしたとか 珍談はいくらでもある それでもちゃんと卒業したのだから “良き時代” だったのだろう もっとも私たち三人とも 植田先生とは深い人間的つながりを持ったと信じている 単位を集めただけの卒業とは 違うという自負はある（古谷綱正）

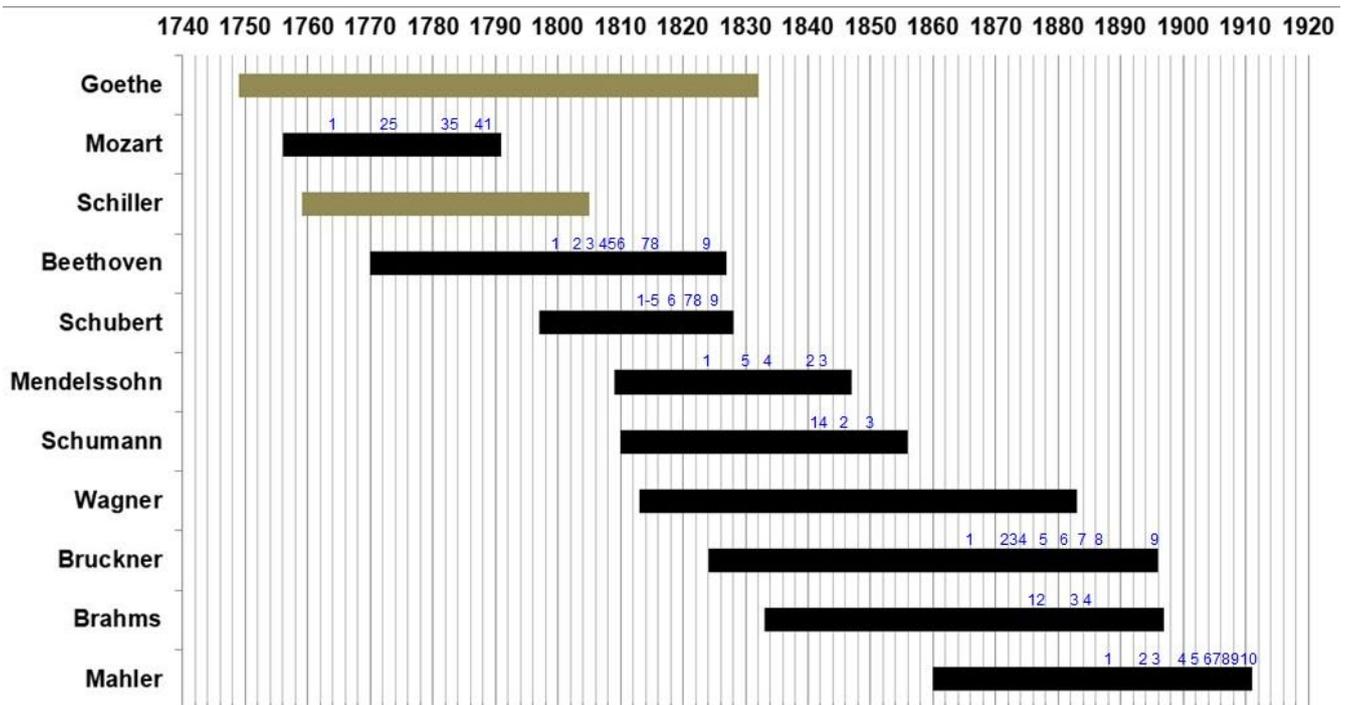
確かに “良き時代” だったんだと羨ましくもなりますね。

参考文献

- (1) 朝比奈隆、『楽は堂に満ちて』、日本経済新聞社（1978）、中央公論社（1995）、音楽之友社（2001）
- (2) 響敏也、『親父の背中にアンコールを 朝比奈隆の素顔の風景』、大阪書籍（1985）
- (3) 木之下晃、『朝比奈隆 長生きこそ、最高の芸術』、新潮社（2002）
- (4) 岩野裕一、『朝比奈隆 すべては「交響楽」のために』、文藝春秋（2008）
- (5) 中丸美繪、『オーケストラ、それは我なり 朝比奈隆 四つの試練』、文藝春秋（2008）、中公文庫（2012）、現在はKindle版あり
- (6) 渡辺佐（たすく）、『オーストリア辺境の旅』、サンライズ出版（2010）、現在はKindle版あり〔本書のオリジナルは、『聖フロリアンの鐘—大阪フィル欧州公演の記録』、第一法規版（1977）で、その新訂・一部削除・増補版となっています。〕

追記

朝比奈さんはドイツ系、とりわけベートーヴェン・ブルックナー・ブラームスをよく演奏しました。そこで、古典派からロマン派にかけての主な作曲家とその交響曲の作曲時期をおおよその位置に示します。



朝比奈さんのブルックナーは最高とも言われます。なかでも1975年10月12日、大阪フィルハーモニー交響楽団が、オーストリアのリンツ郊外にある聖フロリアン修道院(大オルガンの下の地下聖堂にブルックナーが眠っています https://en.wikipedia.org/wiki/St._Florian_Monastery)で交響曲第7番(上図からも分かるようにブルックナーが敬愛するワーグナーが亡くなったところに作曲され、第2楽章はワーグナーへの「葬送音楽」とされています)を演奏したときのことです。渡辺佐さんの著書(6)から抜粋しましょう。

定刻より約一五分遅れて、朝比奈のタクトが動いた。(中略)第一楽章の終わったところで、数人、あるいは十数人が拍手をした。長大なこの楽章を一曲の終りと勘ちがしいとは思えない。感に堪えかねての拍手であつたらうか――。

第二楽章。(中略)悲哀に沈む旋律が宗教的な慰めを得て、消え入るような二つのピッチカートで息を止めた。朝比奈は次の楽章へ移ろうとして、タクトを上げかけた。その瞬間である。

鐘楼の鐘が低く重く鳴った。長い余韻を残して、あたかも前の楽章の音楽の続きであるかのように響いた。一つの鐘が消えて、朝比奈の体がかすかに動こうとした時、また一つの鐘が鳴った。そこで朝比奈は、それが五時の時鐘であることに気付き、手を下ろした。

まさに、天恵とでもいうべき奇蹟であった。偶然はいくつか重なっていた。開演の遅れ、第一楽章のあとの戸惑いがちな拍手、それらがなければ、演奏中に鐘は鳴ったはずであった。(中略)

その時、聖フロリアン修道院の大理石の広間に居合わせた大阪フィルの一〇〇人と、オーストリアの聴衆の約六〇〇人は、夕闇の迫る中で、ひとときの静寂に息のみ、ひとしく鐘の響きに聞き入ったのであった。

中丸さんの著書(5)でも、「朝比奈がタクトを上げかけた瞬間である。鐘楼から五時をつげる鐘の音が響いてきた。それは、地下から沸き上がってきたブルックナーの意志をしめす奇跡のように感じられた」と感銘深く表現されています。なお幸いにも、このときの演奏は昨秋に最新マスタリングされたCDでも聴くことができます。鐘の音は耳を澄ませば“かすかに”聞こえる程度ですが、確かに深い感動を覚えます。



(ミュンヘンとウィーンの直線距離は350 km。ミュンヘン・ザルツブルク・リンツ・ウィーンが、東西方向に100 km程度の間隔で並んでいることが分かります。)

朝比奈さんには、さらにベートーヴェンの音楽でも感銘深いことがおこります。朝日新聞の天声人語は2000年12月31日、朝比奈さんを話題としています。「おととい、朝比奈さんは大阪のフェスティバルホールで、ベートーヴェンの第九交響曲を指揮した。演奏は大阪フィルハーモニー交響楽団。素晴らしい出来で、客席を埋めた二千七百人が湧いたようだ。第九を振ったのはこれで二百五十回目、現在九十二歳である。」続く12月30日も第九で二百五十一回目でした。しかし、2001年が明けて21世紀を迎え、朝比奈さんも九十三歳になった10月24日に名古屋で行った演奏会の翌日に入院、このため12月29日の朝比奈さんにとって二百五十二回目となるはずだった第九の演奏会は、若杉弘さんによる代理指揮で行われました。木之下さんの著書(3)によると、「朝比奈さんは、演奏が第三楽章からフィナーレに入る夜八時頃に危篤となり、演奏会が終わって間もない午後十時三十六分、ついに旅立たれた」とのことです。木之下さんは次のように結んでいます。「朝比奈さんは、世を去るその最期の日まで、指揮者として現役を貫いたのであった。」

付録

井上靖全集（新潮社、1995-2000）総目次

(編集人新規作成:ルビや補足箇所などは藍色字に、三高・京大・京都関係で気付いた箇所は赤字にしました。抜けや間違いがあると思いますので、お気付きの場合は sakura@hideoyoshida.com までご一報いただければ幸いです。)

第1巻	第2巻	かしわんば	第3巻	滝へ降りる道
北国.....21	比良のシャクナゲ.....7	表彰.....356	ある愛情.....9	夏花.....374
地中海.....45	漆胡樽.....33	勝負.....366	ある自殺未遂.....19	晩夏.....392
運河.....63	人妻.....50	山の湖.....374	七夕の町.....34	海浜の女王.....402
季節.....79	踊る葬列.....51	利休の死.....397	ある偽作家の生涯.....45	頭蓋のある部屋.....403
遠征路.....99	岬の絵.....70	潮の光.....407	二枚の招待状.....76	美也と六人の恋人.....417
乾河道.....125	あすなろう.....77	傍観者.....429	昔の愛人.....101	断崖.....437
傍観者.....169	断雲.....93	百日紅.....453	梧桐の窓.....112	山の少女.....459
星闌干.....207	七人の紳士.....105	澄賢房覚書.....463	鶉.....125	爆竹.....472
拾遺詩篇.....251	流星.....123	大いなる墓.....493	薄氷.....134	再会.....479
謎の女(続篇).....349	早春の墓参.....134	夜明けの海.....506	楼門.....144	ある日曜日.....481
夜霧.....358	星の屑たち.....152	斜面.....526	北の駅路.....156	石の面.....498
三原山晴天.....362	死と恋と波と.....173	小鳥寺.....537	貧血と花と爆弾.....168	燃ゆる緋色.....507
初恋物語.....383	二分間の郷愁.....195	玉碗記.....548	桶狭間.....205	青い照明.....520
紅荘の悪魔たち.....403	石庭.....198	三ノ宮炎上.....565	氷の下.....219	黄いろい帽子.....529
霰の街.....423	波紋.....209	秘密.....590	楕円形の月.....234	風わたる.....532
あすなろう.....431	雷雨.....228	古九谷.....595	小さい旋風.....246	騎手.....544
戦友の表情.....434	碧落.....246		千代の帰郷.....261	春寒.....556
母の手.....437	黄色い鞆.....257		白い手.....272	天目山の雲.....570
旧友.....439	舞台.....275		仔犬と香水瓶.....288	春のうねり.....586
めじろ.....442	銃声.....294		贈りもの.....307	伊那の白梅.....602
無声堂.....445	無蓋貨車.....311		海水着.....309	
ある兵隊の死.....448	年賀状.....313		青いボート.....311	
猟銃.....457	悪魔.....315		落葉松.....315	
闘牛.....495	結婚記念日.....329		水溜りの中の瞳.....327	
通夜の客.....541	蜜柑畑.....340		あげは蝶.....348	

第4巻	湖の中の川..... 576	第5巻	幽鬼..... 508	第6巻	
異域の人..... 7	白い街道..... 584	俘囚..... 9	青葉の旅..... 517	神かくし..... 9	
信康自刃..... 20	湖岸..... 598	ダム of 春..... 20	楼蘭..... 536	ある交友..... 20	
稻妻..... 36	篝火..... 606	川の話..... 33	川村権七逐電..... 566	故里の海..... 34	
末裔..... 45		真田軍記..... 50	平蜘蛛の釜..... 579	梅林..... 41	
みどりと恵子..... 72		颱風見舞..... 93	一年契約..... 595	ハムちゃんの正月.. 49	
野を分ける風..... 90		夏の雲..... 103		とんぼ..... 57	
大洗の月..... 111		ざくろの花..... 122		凍れる樹..... 66	
漂流..... 122		初代権兵衛..... 133		洪水..... 91	
湖上の兎..... 141		紅白の餅..... 153		面..... 105	
グウドル氏の手套 152		梅..... 165		冬の来る日..... 117	
少年..... 163		あした来る人..... 168		街角..... 132	
信松尼記..... 167		その人の名は言えな		馬とばし..... 140	
僧行賀の涙..... 184		い..... 171		春の入江..... 149	
森蘭丸..... 198		どうぞお先に..... 174		北国の春..... 167	
驟雨..... 219		火の燃える海..... 189		狼災記..... 180	
ひとり旅..... 228		蘆..... 206		考える人..... 196	
その日そんな時刻 241		暗い舞踏会..... 219		補陀落渡海記..... 214	
昔の恩人..... 286		レモンと蜂蜜..... 235		海の欠片..... 232	
胡桃林..... 295		夏草..... 247		ローマの宿..... 244	
春の雑木林..... 321		高嶺の花..... 259		小髻梯..... 260	
赤い爪..... 334		孤猿..... 270		訪問者..... 277	
柰さん..... 352		波の音..... 277		晴着..... 285	
青いカフスポタン... 355		司戸若雄年譜..... 288		岩の上..... 295	
花粉..... 358		ある関係..... 296		菊..... 304	
鮎と競馬..... 371		ある旅行..... 306		故里美し..... 315	
殺意..... 386		良夜..... 320		色のある間..... 325	
父の愛人..... 397		犬坊狂乱..... 332		フライイング..... 339	
風..... 407		トランプ占い..... 346		加芽子の結婚..... 356	
夜の金魚..... 413		佐治与九郎覚書... 361		古い文字..... 365	
錆びた海..... 423		屋上..... 370		裸の梢..... 390	
チャンピオン..... 439		高天神城..... 380		夏の焰..... 400	
投網..... 472		四つの面..... 390		明るい海..... 407	
合流点..... 480		夏の終り..... 401		見合の日..... 420	
姨捨..... 497		ある女の死..... 410		別れ..... 434	
二つの秘密..... 511		別れの旅..... 423		明妃曲..... 445	
天正十年元旦..... 530		冬の外套..... 446		あかね雲..... 465	
帰郷..... 536		ポタン..... 454		僧伽羅国縁起..... 472	
風のある午後..... 543		奇妙な夜..... 463		城あと..... 479	
黙契..... 555		満月..... 473		宦者中行説..... 497	
失われた時間..... 564		花のある岩場..... 488		羅刹女国..... 508	

土の絵.....517	第7巻	ほくろのある金魚..603	第8巻	楊貴妃伝.....411
監視者.....525	短篇	ひと朝だけの朝顔 605	流転.....7	風濤.....573
塔二と弥三.....531	わが母の記.....9	三ちゃんと鳩.....607	その人の名は言えな	
ローヌ川.....540	永泰公主の頸飾り..97	猫がはこんできた手	い.....69	第16巻
富士の見える日...550	褒姒(ほうじ)の笑い112	紙.....610	黯い潮.....231	夏草冬濤.....7
冬の月.....561	墓地とえび芋.....119		白い牙.....325	後白河院.....407
眼.....572	魔法の椅子.....129		戦国無頼.....431	おろしや国酔夢譚 509
	テペのある街にて 136			
	帽子.....153		第9巻	第17巻
	古代ペンジケント..161		青衣の人.....7	化石.....7
	胡姫.....179		暗い平原.....139	夜の声.....455
	魔法壘.....187		あすなろ物語.....197	西域物語.....611
	崑崙の玉.....194		昨日と明日の間...301	
	海.....215		風林火山.....525	第18巻
	四角な石.....222			わだつみ.....7
	アム・ダリヤの水溜り		第10巻	
234		あした来る人.....7	第19巻
	聖者.....245		淀どの日記.....277	額田女王.....7
	風.....261		満ちて来る潮.....521	北の海.....297
	鬼の話.....270			
	桃李記.....290		第11巻	第20巻
	壺.....307		黒い蝶.....7	櫛の木.....7
	道.....316		射程.....173	四角な船.....235
	二つの挿話.....328		氷壁.....399	星と祭.....499
	ダージリン.....335			
	セキセイインコ.....359		第12巻	第21巻
	川の畔り.....366		天平の薨.....7	流沙.....7
	炎.....388		海峡.....105	
	ゴー・オン・ボーイ.400		敦煌.....285	第22巻
	石濤.....412		蒼き狼.....421	幼き日のこと.....7
	生きる.....425			本覚坊遺文.....119
			第13巻	孔子.....223
	戯曲		渦.....7	
	明治の月.....443		しろばんば.....365	
	就職圏外.....457			
			第14巻	
	童話		崖.....7	
	星よまたたけ.....477		憂愁平野.....543	
	銀のはしご.....563			
	どうぞお先きに！.599		第15巻	
	くもの巣.....601		城砦.....7	

第23巻	父のこと..... 176	青春の粒子..... 245	私と毎日会館..... 300	私の洋画経歴..... 529
私の自己形成史..... 17	あすなろのこと..... 177	千本浜に夢見た少年	ハトとAさん..... 300	今年のプラン..... 531
忘れ得ぬ人々..... 45	三つの海..... 179	の日々..... 246	杉さんのこと..... 302	勝手な夢を二つ..... 531
過ぎ去りし日日..... 71	風の話..... 180	金井君の詩を読んで	竹本辰夫君のこと 303	作家の日記..... 532
＊	ほんとうのライスカレ 247	勇気あることば..... 304	白い手の少女..... 534
[旭川]	一..... 182	沼津とわたし..... 248	法隆寺のこと..... 305	趣味ということ..... 535
旭川・伊豆・金沢... 123	新緑と梅雨..... 184	記念誌刊行にあたつ	中国山脈の尾根の村	正月の旅..... 541
出生地の話..... 125	天城の粘土..... 185	て..... 252 306	私の一日..... 542
北海道の春..... 126	「しろばんば」..... 187	ああ沼津中学！..... 253	「サンデー毎日」と私	「ピクニック」を観る
すずらん..... 127	土蔵の窓..... 187	[大正十五年書簡] 254 309 544
[湯ヶ島]	わさびの故里..... 188	[金沢]	夕暮の富士..... 310	某月某日..... 546
雑木林の四季..... 128	故里美し..... 190	金沢の正月..... 258	酒との出逢い..... 314	講道館..... 546
都会と田舎..... 129	容さざる心..... 191	あんころ..... 259	辻さんと私..... 316	季節の言葉..... 550
龍若の死..... 130	思い出すままに... 194	私の石川県時代... 260	毎日新聞と私..... 317	夏の終り..... 551
伊豆の食べもの... 132	天城湯ヶ島..... 205	井戸と山..... 263	終戦の放送 陛下を	東京という都会..... 552
子供の正月..... 133	七歳の時の旅..... 206	弔辞..... 265	身近に..... 318	樹木の美しさ..... 554
湯ヶ島..... 134	故里の富士..... 208	五陵の年少..... 266		団体旅行者..... 555
郷里のこと..... 137	幼い日々影絵... 209	五陵の年少..... 267	随想	山登りの愉しみ..... 556
らくがん..... 139	故里の家..... 210	四十年目の柔道着	わが一期一会..... 323	私の登山報告..... 558
故里の鏡..... 141	わさび美し..... 211 268	四季の雁書..... 453	映画「遭難」を見る 560
母を語る..... 143	[沼津]	「オロチヨンの挽歌」讃	＊	大阪駅付近..... 561
幼時の正月..... 146	わが青春放浪..... 212 271	秋の夜..... 503	ひばの木..... 562
故郷への年賀状... 148	人と風土..... 220	私の四高時代..... 272	近くに海のある風景	季節の言葉 五月 564
子供と風と雲..... 148	試験について..... 226	思い出多き四高... 273 503	夏の初め..... 565
ふるさと一伊豆一 149	わが青春記..... 228	[京大]	水仙のはなし..... 505	旅のこと..... 565
私の味覚..... 151	赤い林檎..... 230	弘前の思出..... 275	あすなろう..... 507	遠雷..... 566
貫く実行の精神..... 153	前田先生のこと... 231	十二段家..... 276	日記..... 508	皇太子よ、おめでとう
子供の頃..... 154	「むらさき草」の著者	龍安寺石庭..... 277	永平寺の米湯..... 509 574
故里の山河..... 156 232	仁和寺の楼門..... 279	アメリカ文化..... 510	養之如春..... 575
郷里伊豆..... 157	我が十代の思い出	四季の石庭通い... 280	学校給食のこと... 512	海の元旦..... 576
故里の子供たち... 161 234	九鬼教授のこと... 282	某月某日..... 513	石と木と..... 576
ふるさとの正月..... 161	静岡の思い出..... 235	[毎日新聞社]	僕にかわって..... 514	才能 あなたの新しい
天城の雲..... 162	千本浜のこと..... 237	「サンデー毎日」記者	登山愛好..... 515	首途に... .. 578
湯ヶ島小学校..... 164	私の愛することば 238	時代..... 285	講演旅行スナップ 517	穂高の犬..... 579
故里の家..... 165	青春のかけら..... 238	学芸部..... 290	講道館の寒稽古... 518	感じたこと二つ..... 581
匂い..... 167	中学時代の友..... 239	老兵..... 292	父の願い..... 520	山なみ美し..... 582
天城に語ることなし	たのしかった国語の	「創造美術」の誕生	新聞記者というもの	秋索々..... 583
..... 169	時間..... 241 293 521	新聞記..... 584
幼いころの伊豆... 170	針金の欠片と夕暮の	日記から..... 294	京に想う..... 525	養之如春 I..... 586
私のふるさと..... 171	富士..... 242	二十年..... 298	某月某日..... 526	山へ行く若者たちに
台風..... 174	わが青春の日々... 244	鳩..... 299	クリスマス・イブ東京... 527 587

冬を讃う..... 589	神かくし..... 648	点は墜石の如く..... 703	月光しるき夜..... 769	第24巻
某月某日..... 590	還暦有感..... 650	贅沢な時間..... 704	手術で得た天命への	作家・作品論
山の美しさ..... 591	切り棄てよ..... 651	天然の林美し..... 705	理解..... 771	[萩原朔太郎]
高い星の輝き..... 593	正月三ケ日..... 652	落葉しきり..... 706	天命について..... 772	詩人との出会い..... 19
私の辞書..... 595	年の初めに..... 653	冬の朝..... 708		[萩原朔太郎初版本
新しい政治への期待	異国で考える日本..... 655	去年・今年..... 710		翻刻版]推薦文]..... 21
..... 596	駒場の春..... 657	一本の長い道..... 713		「郷土望景詩」讃..... 21
今日このごろ..... 598	切りすてよ..... 658	雪の宿..... 714		[北原白秋]
人生の智慧..... 601	私のゴルフ..... 659	だんらん団梨..... 715		名作かんしょう..... 23
二つのブービー賞..... 601	生命の問題..... 660	雪月花..... 717		[堀口大學]
料理随筆..... 604	ゴルフ..... 662	きれい寂び..... 719		堀口先生のこと..... 25
人間を信ずるといふこ	一年蒼煌..... 663	永遠の信頼樹立を		[三好達治]
と..... 605	陽光輝く辿跡を訪ね 726		「測量船」と私..... 28
道 道 道..... 607	る..... 665	柔道の魅力..... 728		三好達治の「冬の日」
父として想う..... 609	少年老いやすし..... 666	年の初めに..... 729	 29
けやきの木..... 614	文化の氾濫..... 667	カラヤン讃..... 730		[丸山薫]
若木とびょうぶ..... 615	これを養う春の如し	日本独自の美しさ..... 732		二つの詩集..... 31
北海のフグ..... 616 668	年の初めに..... 733		丸山薫の詩..... 32
富士の話..... 619	職人かたぎ その他	自分の見方で物を見		[草野心平]
私の文学碑..... 620 669	る..... 736		草野心平・讃..... 35
猫の話..... 622	旅で会った若者..... 670	人生の滑り台..... 737		草野さんのこと..... 36
断絶..... 624	万国博開会式を見て	旅行..... 739		[金子光晴]
少年に与える言葉..... 625 673	年頭に思う..... 740		金子光晴氏の詩業..... 37
四角な箱の中で..... 626	樹木美し..... 676	人生の階段..... 742		[安西冬衛]
私のビジョン..... 628	明窓浄机..... 677	養之如春Ⅱ..... 744		安西冬衛氏の横顔..... 38
三つの書齋..... 629	文化財の保護につい	集会へ寄せる..... 744		[北川冬彦]
ローマから東京へ..... 630	て..... 679	四十五歳という年齢		詩集・北京郊外にて
オリンピック開会式を	孔子の言葉..... 681 745		他..... 39
見る..... 632	幸福について..... 682	木枯..... 747		[竹中郁]
五輪観戦記..... 635	桃李の季節..... 685	小寒、大寒..... 748		詩人 竹中郁氏..... 40
たくまざる名演出..... 636	言葉の生命..... 687	春寒..... 748		詩集 ポルカ マズル
私のさかな..... 638	日本のことば・日本の	ひまわり..... 749		カ..... 42
人生の階段..... 638	こころ..... 689	七十五歳の春..... 749		[小野十三郎]
初孫讃..... 640	六十六段目の展望	好きな言葉..... 751		拒絶の木..... 42
ゴルフ..... 641 690	四季それぞれ..... 759		生粋の詩、生粋の詩
旅の効用..... 642	けやき美し..... 691	古稀の旅..... 762		人の魅力..... 43
旅先からの便り拝見	無形遺産三つ..... 693	己れを尽くす..... 763		[伊東静雄]
..... 643	時計とカメラ..... 695	喜寿の年..... 764		伊東静雄の詩..... 44
お話を集めて歩く..... 644	ものを考える時間..... 698	現代史の記述者..... 766		「夏の終」解説..... 45
還暦有感..... 645	中国の文化財保護	年の初めに..... 767		蟬のこえ..... 46
山美し 山恐ろし..... 647 700	尽己..... 768		伊東静雄について..... 47

「伊東静雄全集」に寄 せて..... 48	解説..... 106	解説..... 192	[伊藤整]	「夜のリボン」推薦 文]..... 277
[真田喜七] 109	芥川龍之介の「トロツ コ」..... 201	[高見順]	解説..... 277
真田氏のこと..... 49	豪華で精巧な作品	好きな短篇..... 202	「死の淵より」につい て..... 239	舟橋氏の姿勢..... 280
真田喜七氏の作品 50 110	芥川の短篇十篇... 203	二冊の本..... 242	新・忠臣蔵に期待する 281
真田さんのこと..... 51	谷崎先生のこと... 110	[菊池寛]	[岡本かの子]	日本文の正統派... 282
[富士正晴]	解説..... 112	「[菊池寛文学全集] 推薦文]..... 205	丸子のとろろ汁..... 244	弔辞..... 282
富士正晴版画展..... 53	遺作として新たに読 み返したい..... 132	菊池さんのこと..... 205	[中島敦]	舟橋さんの人と作品 284
[「賈・久坂葉子伝」推 薦文]..... 53	「細雪」讚..... 133	[野上弥生子]	孤独な咆吼(ほうこう) 248	[檀一雄]
[清岡卓行]	「吉野葛」を読んで135	野上先生のこと..... 207 248	石川五右衛門..... 286
芸術的な握手..... 54	[佐藤春夫]	野上さんのこと..... 208	中島敦全集全四巻に 寄せて..... 249	足跡に汚れない287
	佐藤春夫..... 137	[川端康成]	山月記..... 250	[川口松太郎]
[森鷗外]	晶子曼陀羅..... 138	川端康成の受賞... 210	ふしぎな光芒..... 251	川口さんと私..... 288
雁..... 55	「悲壮美の世界」推 薦文]..... 139	川端さんのこと..... 212	ふしぎな光芒..... 253	[永井龍男]
「追儼」その他..... 56	悲壮美の世界..... 140	晩年の川端さん... 213	「木乃伊」讚..... 253	永井さんのこと..... 290
解説..... 59	佐藤春夫全集につい て..... 141	川端さんの眼Ⅰ... 215	[大佛次郎]	「青梅雨」その他... 292
[夏目漱石]	「自選佐藤春夫全集」 第六巻解説..... 142	川端さんの眼Ⅱ... 216	大佛さんの作品... 255	[坂口安吾]
漱石の大きさ..... 65	佐藤春夫氏の「戦国 佐久」..... 145	「定本図録川端康成」 刊行のことば..... 217	大佛さんの椅子... 256	信長..... 294
“猫”と私..... 66	わが北海道..... 147	鬱然たる大樹を仰ぐ 218	若き日の信長..... 258	坂口さんのこと..... 295
[徳田秋声ほか]	北海道の先生 二つ の句..... 148	「伊豆の踊子」につい て..... 218	大佛さんと私..... 259	[和田芳恵]
解説..... 69	[「定本佐藤春夫全 集」推薦文]..... 149	「眠れる美女」を読む 221	「つきじの記」を読んで 261	弔辞..... 297
[島崎藤村]	解説..... 149	短篇四つ..... 224	[吉川英治]	「和田芳恵全集」推 薦文]..... 298
解説..... 74	殉情詩集..... 169	掌の小説と装画集「四 季」より..... 228	[「私本太平記」推薦 文]..... 262	[今官一]
藤村全集の意義..... 89	「鷺江の月明」讚... 172	[横光利一]	稀有な作品..... 263	今さんと私..... 299
[永井荷風]	「田園の憂鬱」を読む 174	「眠れる美女」を読む 221	吉川英治のこと..... 263	[野間宏]
荷風の日記..... 90	休息を知らなかった作 家..... 177	中野全集について229	「吉川英治全集」推 薦文]..... 265	野間宏..... 300
[志賀直哉]	解説..... 177	北京の中野さん... 230	秋索索..... 265	小説への誘惑者... 302
志賀さんをいたむ... 94	金沢の室生犀星... 189	中野さんの詩..... 232	吉川英治の仕事... 267	野間宏氏のこと..... 304
一人でも多くの人に95	[室生犀星]	[梶井基次郎]	[丹羽文雄]	一生消えぬ衝撃... 306
「スズメの誤解」..... 95	解説..... 177	小説の文章というもの —梶井基次郎と徳田秋声 —..... 234	永遠の未完成..... 268	栄光と孤高の記録307
晩年の志賀先生..... 98	金沢の室生犀星... 189	[中野重治]	丹羽さんの顔..... 271	[武田泰淳]
[谷崎潤一郎]	[芥川龍之介]	中野全集について229	旅の丹羽文雄..... 272	愛と誓い..... 307
連載されるまで —「少 将滋幹の母」のエピソード —..... 100	宇治拾遺物語と芥川 の作品..... 190	北京の中野さん... 230	[「親鸞」推薦文]... 273	[福永武彦]
「谷崎潤一郎随筆選 集1」解説..... 101	[深田久弥]	中野さんの詩..... 232	文学の大河..... 274	風土..... 308
「吉野葛・盲目物語」 解説..... 103	深田久弥氏と私... 235	[深田久弥]	「海戦」讚..... 274	[由起しげ子]
「盲目物語・聞書抄」	の作品..... 190	深田久弥氏と私... 235	[舟橋聖一]	「語らざる人」につい て..... 309
				[幸田文]

「みそっかす」について.....311	[亀井勝一郎]	石川啄木の魅力...369	講演 詩と私.....402	新潮と私.....466
[庄野潤三]	東洋の美の正しき理	啄木のこと.....369	挽歌について.....412	文芸時評.....467
愛撫.....312	解.....338	[島木赤彦]	万葉名歌十首.....415	文学開眼.....470
庄野潤三氏について.....313	出色の中国旅行記.....339	赤彦と私.....371	「きりん」の頃.....422	解釈の自由ということ —歴史小説家の手帳から —.....472
庄野潤三氏の短篇.....315	亀井さんの言葉...340	[若山牧水]	私のイメージ・名歌と 名画.....424	正確な文章.....473
[吉行淳之介]	亀井さんのこと.....341	若山牧水のこと...372	詩人としての江上さん425	妊娠調節と特殊列車474
[「吉行惇之介全集」 推薦文].....317	[中島健蔵]	[「若山牧水全歌集」 推薦文].....375	「風景」と私.....427	ご返事.....475
「鞆の中身」について.....317	「点描・新しい中国」を 読む.....343	牧水の魅力.....376	好きな詩.....428	新聞記者の十年...477
[有馬頼義]	中島氏のこと.....344	[窪田空穂]	富士の歌—忘れがたい 帰還兵の作—.....430	立原章平氏へ.....478
[「失脚」推隠文].....318	中島健蔵氏のこと345	九十歳のりっぱさ..377	ある感慨.....431	文章今昔.....479
[北杜夫]	中島さんのこと.....347	[川田順]	わたしの一首.....432	人間が書きたい...480
「木精」を読んで...318	[高橋義孝]	幕末愛国歌.....378	今日の文学.....433	作家生活八年目...481
[立原正秋]	高橋義孝氏のこと348	西行研究録.....379	貼紙絵.....434	書きたい女性.....483
立原正秋・二題...320	[臼井吉見]	[生方たつゑ]	質的にみた淋しさ..435	私の取材法.....484
「立原正秋文学展」序.....323	「安曇野」について350	[「生方たつゑ選集」推 薦文].....380	たれか新聞記者を書 くものはないか.....436	書き出し—自然に、素直 に—.....485
八月の午後.....323	「10冊の本」の頃...350	[「歌集 火の系譜」推 薦文].....380	人生の始末書.....437	風景描写—現地へ行っ てノートする—.....487
[司馬遼太郎]	[十返(とがえり)筆]	生方さんの仕事...381	作品の周囲.....438	伊豆の風景.....488
「殉死」私見.....315	十返筆のこと.....352	推薦の言葉.....381	芥川賞を受けて...439	作家のノート.....489
「ひとびとの登音(きょう おん)」について.....326	[山本健吉]	生方さんの仕事...382	二つの文学賞—永井龍 男氏へ—.....440	天風浪浪.....541
[山崎豊子]	山本氏との別れ...354	[「人生音痴」推薦 文].....383	文学と私.....441	言葉について I ...542
「暖簾」について...327	[江藤淳]	極北に立った鋭さ..383	「法王庁の抜穴」の面 白さ.....443	直言に答える—篠田— 士氏へ—.....544
いっきに読ませる面白 さ.....328	優れた伊東静雄論356	[角川源義]	小説は誰でも書ける か.....444	「蒼き狼」の周囲...545
[小林秀雄]	[森田たま]	角川さんとゴルフ..384	私の好きな作中人物447	歴史小説の主人公550
小林さんのこと...329	[森田さんのこと.....358	月の人の.....386	私の理想の女性...448	王朝日記文学につい て.....552
小林さんのこと...330	[小泉信三]	「きりん」創刊のころ395	壁を相手の新聞小説450	自作「蒼き狼」につい て.....558
[河上徹太郎]	「海軍主計大尉小泉 信吉」を読む.....359	現代詩に望む...397	私と文壇.....453	言葉の話.....566
揚州に於ける河上氏332	[「小泉信三全集」推 薦文].....361	「長恨歌」讃.....397	締切り.....454	宝石と石ころ.....568
[中村光夫]	感銘深い小泉信三 さん.....362	「風景」と詩.....399	将来は芸術家に...456	文学を志す人々へ— 詩から小説へ—.....570
旅の話.....334	「海軍主計大尉小泉 信吉」を読んで...364	私の好きな短歌一つ401	私の小説作法.....459	「宇治十帖」私見...574
「明治五年」について336	[桑原隲蔵(じつぞう)]401	小説とモデル.....463	小説の材料.....576
	桑原隲蔵先生と私366		作中人物.....465	
	[石川啄木]			

講演 小説について	感想..... 671	第25巻	新制作派展評..... 375	法隆寺のこと..... 423
..... 578	孔子の言葉..... 673	美術エッセイ	関西作家院展出品画	歴史のかけら—北斎と
言葉についてⅡ... 590	“負函”の日没—「孔子	美しきものとの出会い	展..... 376	法隆寺と—..... 428
芥川賞受賞の頃... 592	取材行—..... 674 13	二科展評..... 377	法隆寺..... 429
作家生活十四年... 594	負函..... 682	カルロス四世の家族	青龍展を見る..... 378	わが愛するもの 法隆
文學界と私..... 595		—小説家の美術ノート—	時局解説 美術界の	寺..... 430
老舎先生の声..... 597	古典書と美術書... 691 101	決戦体制..... 380	白鳳・天平の美..... 431
作家生活十六年... 598	私の愛読書..... 693	ゴッホの星月夜—小説	—水会展評..... 382	湖畔の十一面観音
「沙石集」を読んで600	私の読書遍歴..... 694	家の美術ノート—..... 149	新燈社展..... 383 432
三つの作品..... 602	スケジュールをたてる	忘れ得ぬ芸術家たち	文展の日本画・洋画	春の十一面観音像
新春所感—忘れられぬ 696 201 384 434
文章—..... 604	古典への道しるべ—天	レンブラントの自画像	春の青龍社展..... 385	渡岸寺十一面観音像
文字 文字 文字..... 605	心の「茶の本」に大きな感	—小説家の美術ノート—	陸軍美術展..... 385 435
N君のこと..... 607	銘—..... 697 259	大日展評..... 386	十一面観音..... 436
講演 歴史と小説... 609	茶の本..... 698	*	新興美術協会展評	湖畔の十一面観音
明治の資料..... 617	英雄物語の面白さ—	関西日本画壇展望 387 444
講演 明治の風俗資料	「世界山岳全集」にふれて 315	戦時文展を見る... 388	日本の彫刻 飛鳥時
..... 618	—..... 699	東京画壇展望..... 324	第二回京展評..... 389	代..... 446
千利休を書きたい 625	小林高四郎「ジンギス	院展評..... 335	日展の不人気..... 390	日本絵巻物全集第一
短篇の河原..... 626	カン」Ⅰ、Ⅱ..... 701	青龍展..... 338	院展日本画を観る 391	巻 源氏物語絵巻 447
講演 歴史小説と史実	ふたつの作品..... 703	文展評..... 340	青龍社展評..... 392	ノートから..... 448
..... 629	自分で選ぶ喜び... 704	伝統について..... 343	美術断想..... 393	龍安寺の石庭..... 450
正確な言葉..... 640	読書について..... 705	青龍社展評..... 347	行動美術展評..... 397	わが家の「蘭疇」... 451
作家七十歳..... 641	遠い読書の思い出	作家の誠実..... 348	二科展評..... 398	私の東大寺..... 454
枯れかじけて寒き 643 707	奉祝展日本画評... 352	日展を見る..... 399	作家の関心..... 459
私の文章修業..... 646	読書のすすめ..... 708	無名仏讃..... 354	日本画の新人群... 401	明治の洋画十選... 461
郭沫若先生のこと 649	必読の書..... 709	院展・青龍展所感 357	純美術家の工芸品製	日本の伝統工芸の美
歴史小説と私..... 650	私にとっての座右の	春の青龍社展..... 360	作..... 402	しさ..... 466
日本文化の独自性	書..... 710	小西謙三氏油絵展	日本画と額縁..... 403	おしゃれな観音さま—
..... 651	三冊の本..... 714 360	現実遊離の画境... 403	室生寺十一面観音像—
巴金先生へ..... 656		乾坤社展をみる... 361	連合展を見る..... 405 467
私のライフ・ワーク 658		院展と青龍展..... 362	院展評..... 406	日本国宝展を見て 468
いまの日本人を見て		院展私観..... 364	院展を見る..... 407	美しいものとの取引き
頂きたい—フランシス・キ		文展評 日本画... 366	創造美術展を見る 407 470
ング氏への返書—..... 661		大東亜戦争美術展を	美術記者..... 408	虚空の庭..... 471
煎風の五月—国際ペン		見る..... 367	美しきものとの出会い	いつでも小さい像に光
大会に寄せて—..... 663		春の美術展から... 368 411	が..... 477
中央公論社と私... 664		春陽会展評..... 370	竹竹竹..... 417	唐招提寺・ノート... 478
巴金先生と私..... 666		国展評..... 371	手帳..... 419	大きな宝石箱..... 480
講演 共存共栄の哲学		美術の鑑賞..... 372	好きな仏像..... 421	「沖縄の陶工 人間国
..... 668		青龍展評..... 374	如来形立像..... 422	宝 金城次郎」序... 483

人間文化財への熱情 484	旅の平山さん..... 535	いる美術..... 573	セザンヌ「壺の花」622	利休と親鸞..... 686
「鉄斎の仙境」など487	平山さんのこと..... 535	肯定と否定..... 574	女性に神を見出した 時代..... 623	天武天皇..... 687
梅華書屋図..... 490	「平山郁夫全集2 歴 書の国・中国..... 576	豪華絢爛たる開花577	青く大きな空..... 624	「観無量寿経」讚... 708
関雪を悼む..... 492	訪大和路」序..... 537	「明清工芸美術展」に 寄せて..... 579	モナ・リザ私見..... 626	歴史に学ぶ..... 709
関雪追想..... 493	「平山郁夫シルクロー ド展」によせて..... 538	澄んだ華麗さ..... 580	ミレーの「晩鐘」につ いて..... 628	私の中の日本人—親 鸞と利休—..... 713
橋本関雪生誕百年の 展覧会に寄せて... 495	加山又造展図録序文 539	「漢唐壁画展」を見て 581	レンブラントの「老ユ ダヤ人の肖像」につ て..... 629	船のこと港のこと... 716
須田国太郎のこと—嵐 山の遅桜—..... 496	加山又造氏の仕事 540	長信宮灯について581	“天命”秘めた団欒の 美しさ..... 630	持統天皇..... 717
須田国太郎の「野薔 薇」..... 500	脇田和氏の作品... 542	「韓国美術五千年展」 を見て..... 582		西行と利休..... 729
福井良之助氏のポエ ジー..... 501	西山英雄氏のこと 546	回教寺院、その他 585		利休の人間像..... 732
高山辰雄氏のポエジ ー..... 502	西山さんのお仕事 547	「敦煌壁画写真展」に 寄せて..... 591	歴史エッセイ	遺跡とロマン..... 733
聖家族 讚..... 504	福田さんのこと..... 548	加彩騎馬武士俑... 593	中尊寺と藤原四代635	歴史の顔..... 738
上村松篁展の意味 505	三岸節子展に寄せて 549	「古代エジプト展」を見 て..... 594	戦国時代の女性... 636	
上村松篁氏と私... 508	三岸さんの独自なとこ ろ..... 551	雲岡・菩薩像..... 596	遣唐船のこと..... 638	日本の英雄..... 640
東山魁夷氏の「窓」 510	舟越さんのこと..... 553	敦煌千仏洞点描... 597	茶々の恋人..... 641	戦国時代の女性... 643
東山魁夷氏の作品 512	秋野さんのこと..... 554	敦煌莫高窟の背景 603	木乃伊考..... 649	武将の最期..... 652
「瑞光」の前に立ちて 514	青邨先生のこと..... 555	序・敦煌の美術..... 607	鑑真和上のこと..... 653	古代説話のこころ 655
「行く秋」の前に..... 515	河井寛次郎論..... 557	敦煌一三〇窟の弥勒 大仏像..... 608	「鑑真和上」「鑑真」 657	絵巻物による日本常 民生活絵引..... 659
近藤悠三氏のこと 516	杉本健吉「新平家・画 帖」上..... 558	中国文物展ノートから 610	茶々のこと..... 660	千利休..... 662
[近藤悠三作陶五十 年近作展推薦文] 520	島田謹介写真集「旅 窓」..... 559	西域・千年の華..... 614	茶々のこと..... 660	モラエスのこと..... 666
近藤さんのこと..... 520	画家になった美術記 者..... 560	高官の生活風景を描 いた壺..... 615	ゴンチャロフの容貌 673	明治五年..... 675
生沢氏の仕事..... 522	秋山さんの仕事... 562	二十周年を慶ぶ... 616	戦国時代の天正十年 677	仏教讃歌「親鸞」のこ と..... 679
[生沢朗個展推薦 文]..... 523	塔..... 562	アンリ・ルソーの「人形 を持てる少女」につ て..... 617	「かたまり」とリズム— イタリア現代彫刻展を観る —..... 618	讃歌 親鸞..... 681
生沢朗氏と私..... 523	土門拳の仕事..... 565	「かたまり」とリズム— イタリア現代彫刻展を観る —..... 618	二つの主題..... 619	叙事詩的世界の魅力 684
[生沢朗水墨画展推 薦文]..... 525	入江泰吉「古色大和 路」..... 567	ゴヤについて..... 620		
平山郁夫氏の道... 525	小山富士夫編「中国 名陶百選」..... 569	ドガ「少女像」..... 622		
平山郁夫氏と一緒の 旅..... 530	ナゾの古代都市—パキ スタン古代文化展をみて— 570			
平山郁夫氏のこと 533	白瑠璃碗..... 571			
	死せる遺跡と生きて			

第26巻	石山寺のこと..... 129	九月の風景..... 210	み..... 499	行の来日を喜ぶ..... 562
日本紀行	湖畔の城..... 130	街..... 211	遺跡保存二、三..... 500	北京の正月..... 563
穂高の月..... 13	大津美し..... 130	天竜川の旅..... 212		廖（りょう）承志先生
梓川的美しさ..... 15	大津美し..... 133	旅のノートから..... 215	中国の旅から..... 503	の逝去を悼む..... 564
上高地..... 17	仁和寺..... 134	信濃川と私..... 216	世界の大きな星は落	胡耀邦総書記の来日
穂高行..... 19	冬の京都..... 135	正月の旅..... 218	ちた..... 519	を歓迎する..... 566
滝谷を見る..... 22	京の春..... 137	美しい川..... 220	充実した二十年..... 520	葵丘会議の跡を訪ね
ただ穂高だけ..... 23	塔..... 142	忘れ得ぬ村..... 222	大きく、烈しく、優しく	て..... 567
登山..... 25		私の好きな風景..... 224 522	葵丘と都江堰..... 569
沢渡部落..... 27	北国の城下町—金沢—	旅情..... 233	明るくなった国..... 523	中国の友人の皆さん
残したい静けさ美しさ 145	川の話..... 235	雲崗石窟を訪ねて..... 527	の来日を歓迎して..... 570
..... 28	金沢城の石垣..... 146	一文字の風景..... 236	春風吹万里..... 528	朱穆之文化相の来日
豪雨の穂高..... 29	早春の甲斐・信濃..... 147	千曲川..... 239	敦煌の旅..... 530	を歓迎して..... 571
梓川沿いの樹林..... 32	紀の国・伊豆・信濃	「旅と人生」について	文芸復興期の中国	中華人民共和国建国
穂高美し..... 36 149 240 532	三十五周年を祝って
穂高の紅葉..... 38	薄雪に包まれた高山	旅情・旅情・旅情..... 246	新たな信頼と信義の 572
風の奥又白..... 39	の町..... 151	日本の風景..... 252	関係..... 539	年頭にあたって..... 574
新隆浩作品集「穂高」	早春の伊豆・駿河..... 153	川と私..... 257	周揚先生を団長とす	告別の辞..... 575
序..... 41	伊豆生れの伊豆礼讃		る中国作家代表団の	創立三十周年を迎え
穂高..... 44 157	外国紀行	来日を喜ぶ..... 540	て..... 577
初冬の大雪山..... 45	北尾鐮之助「富士箱	異国の旅..... 261	楽しい充実した二十	中国文明ゆりかごの
大佐渡小佐渡..... 45	根伊豆」..... 160	河岸に立ちて—歴史の	日間..... 541	地を訪ねて..... 578
佐渡の海..... 61	富士美し..... 161	川 沙漠の川—..... 375	黄河の流れ..... 542	二十五回目の訪中
岩手県の鬼剣舞..... 64	夜叉神峠..... 163	*	長城と天壇..... 543 579
雪の下北半島紀行..... 66	私の高野山..... 168	東京の敦煌..... 475	最も幸せな作品..... 546	新しい年の始めに..... 580
平泉紀行..... 72		広州のこと..... 477	新たな発展の年..... 546	王蒙文化相の来日を
	瀬戸内海的美しさ..... 175	黄色い大地..... 478	大黄河..... 548	歓迎して..... 581
私の東大寺..... 89	佐多岬紀行—老いたる	中国は大きい..... 480	胡楊の夜..... 550	「中日文化賞」を受賞
奈良と私..... 92	駅長と若き船長—..... 176	中国散見..... 482	桂林讃..... 551	して..... 582
飛鳥の地に立ちて..... 98	沖縄の一週間..... 192	井上靖・中国カメラ紀	会長就任に当って..... 553	年頭にあたって..... 583
大和路たのし..... 102	沖縄の印象..... 195	行..... 483	年頭の言葉..... 554	敦煌の歴史を知って
二月堂お水とり..... 104	沖縄のところにふれる	四年目の中国..... 484	創立二十五周年を迎	ほしい..... 584
お水取りと私..... 104 196	中国の旅—鑑真逝世千	えて..... 555	年頭にあたって..... 585
お水取り・讃..... 112	南紀の海に魅せられ	二百年記念行事—..... 486	私と南京..... 556	周揚さんを悼む..... 586
大和朝廷の故地を訪	て..... 197	旧知貴ぶべし..... 489	年頭に当たって..... 558	新しい年の始めに..... 587
ねて..... 114	海..... 199	揚州の雨..... 490	鳴沙山の上に立ちて	中国人民対外友好協
美しい囃の管—祇園祭	南紀美し..... 200	揚州の旅..... 492 559	会代表団、中国国家
を観る—..... 122	明るい風景 暗い風	中国の旅—国慶節に招	これこそ本当の文化	文物局代表団を歓迎
美しい京の欠片(かけ	景..... 203	かれて—..... 494	交流..... 561	して..... 588
ら)..... 126	旅先にとらえた季節	再び揚州を訪ねて..... 497	日中国交正常化十周	韓国の春..... 589
嵐山と三千院..... 127 205	ふしぎな美しいはにか	年を祝い王震団長—	美しくけなげな韓国学

生.....590	ってー.....687	第27巻	幻覚の街ヒワ.....455	熱.....521
韓国紀行.....591	わが娘に与うー作家の	西域エッセイ	幻覚の街ヒワにて456	民族の足跡 交流の
韓国に古きものをた	父からー.....694	西域に招かれた人々	西トルキスタンの旅	華.....523
ずねて.....593	愛される女性ー女の美9457	シルクロードの風と水
ニューヨークにて...607	しきー.....695	西域紀行1	シルクロードの旅..460	と砂と.....524
欧米の街・東京の街	結婚というもの.....696	アフガニスタン紀行 39	若い日の夢.....463	インダス溪谷を下る
ー新春に想うー.....608	お祝いのことば.....697	アレキサンダーの道	砂丘と私.....465527
ドイツ人のこと.....613	親から巣立つ娘へ69867	天山の麓の町.....471	ペルセポリスの遺址
井上靖・欧州カメラ紀	娘の結婚.....701	遺跡の旅・シルクロー	シェルパの村.....473535
行.....615	長女の結婚.....702	ド.....161	草原の旅 アフガニス	講演 最近の西域の
ダイナミックな美ー「ロ	嫁ぎし娘よ、幸せに	シルクロード地帯を訪	タン.....475	旅から.....541
ーマ・オリンピックー九六704	ねて.....303	並河万里の仕事...476	ボロブドール遺跡に
〇」を見るー.....616	愛についての断章705	クシャーン王朝の跡を	沙漠の国の旅から	立ちて.....553
私のオリンピック...617	女性の美しさ.....713	訪ねて.....321478	若羌(チャルクリク)という
珠玉の広場ヴェネツィ	今年大学を卒業する	*.....	民族興亡の跡にーアフ	集落 西域南道の旅
ア.....617	わが娘とその友達に	岩村忍「アフガニスタ	ガニスタンー.....481555
アメリカの休日.....619714	ン紀行」.....435	回教国の旅.....483	異国辺境の子供たち
アメリカ紀行.....622	「恋愛と結婚」につい	カラコルム.....436	カメラで捉えた遺産557
旅の収穫.....641	て.....715	今西錦司「カラコラ484	ミーラン遺址.....559
日の丸・二題.....643	ある空間ー親と子の関係	ム」・日本映画新社監	並河万里「シルクロー	河西回廊の町.....562
モスクワ・レニングラ	ー.....720	修「カラコルム」.....437	ド砂に埋もれた遺産」	歴史の通った道...564
ード.....645	自分が自分であること	深田久弥「ヒマラヤー	序.....485	文明の十字路口に新た
ニコライのアイコン...655722	山と人ー」.....438	沙漠の町の緑.....486	な光.....567
旅で見る家.....657	幸福の探求.....724	メソポタミア.....440	レンズに憶えておいて	漢代且末(しまつ)国
シベリアの列車の旅	青春とは何か.....726	「さまよえる湖」につい	貰った“沙漠の旅,, 489	の故地.....568
.....659	子供と季節感.....728	て.....441	アナトリア高原の“謎	法顕の旅.....571
シベリア紀行.....661	講演 人間と人間の関	シルクロードへの夢	の民族,,.....491	哈密(はみ)を訪ねる
旅の話.....666	係.....729442	沙漠と海.....500574
シベリアの旅.....668	若者たちのエネルギー	西域のイメージ.....444	土器の欠片.....502	壺「貴族の生涯」...580
人生論・女性論	ー.....738	中央アジアの薔薇446	並河万里「シルクロー	「なら・シルクロード博
男はどんな女性に魅	面を上げ、胸を張って	サマルカンドの市場に	ド」序文.....506	を終えて」.....581
力を感じるか? ...673739	て.....446	西域の旅から.....507	
美しい服装.....674	三つの教訓.....740	砂漠の詩.....447	西域の山河.....509	
善意について.....676		デローシュ=ノーブル	限りなき西域への夢	
少年老いやすしー教科		クール「トウトアंकア512	
書の中の時限爆弾ー..679		モン」.....449	ホータンを訪ねる..514	
女であるために.....681		天山とパミール.....451	トルファン街道.....515	
女のひとの美しさ..683		「大宛」へ寄せる夢ー	命なりけり.....518	
私の恋愛観ー自作に沿		ロシア旅行で訪れたいー	カイバル峠を越えパ	
	453	キスタンへ.....519	
			行けぬ聖地ゆえの情	

第28巻	「サンデー毎日」大衆	小説新潮サロン・懸賞	旺文社児童文学賞	本山物語.....618
西域紀行2	文芸.....400	コント.....473532	山西省の重要性...637
私の西域紀行.....9	「サンデー毎日」百万	山の放送劇.....475	高校生の読書体験記	太田伍長の陣中手記
現代語訳	円懸賞小説.....419	女流文学賞.....476	コンクール.....534639
更級日記.....273	「サンデー毎日」小説	野間文芸賞.....487	伊藤整文学賞.....541	現地報告 敢闘する
西行.....313	賞.....421	吉川英治賞.....497	雑稿	農村②近畿①.....640
舞姫.....369	たばこ製造専売五〇	吉川英治文学賞...499	現代先覚者伝(抄)	玉音 ラジオに拝して
選評	年記念懸賞小説...425	吉川英治文化賞...506545643
「少国民新聞」投稿詩	芥川龍之介賞.....427	北日本文学賞.....508	*	耕しながら考える一福
.....389	文學界新人賞.....457	川端康成文学賞...518	徳島県阿部村.....605	井県鶴山農場の例一..644
「きりん」投稿詩.....390	小説新潮賞.....468	大仏次郎賞.....526	点心.....611	

別巻 (この巻だけは長い行が多いので、2段組に変更)**自作解説**

「井上靖小説全集」自作解説.....25
*
「新文学全集 井上靖集」あとがき.....77
私の処女作と自信作.....78
私の代表作.....80
原作に固執せず.....81
井上靖年譜.....82
「旅路」あとがき.....90
「私たちはどう生きるか 井上靖集」まえがき.....91
「井上靖自選集」著者の言葉.....92
わたしの好きなわたしの小説.....93
「詩と愛と生」あとがき.....94
「三ノ宮炎上」と「風林火山」.....95
「自選井上靖短篇全集」内容見本 著者のことば...95
「射程」ほか.....96
「詩画集 北国」あとがき.....97
「詩画集 珠江」あとがき.....98
「井上靖小説全集」内容見本 著者のことば.....98
二十四の小石.....99
「歴史小説の周囲」あとがき.....103
「井上靖の自選作品」あとがき.....104
「私の歴史小説三篇」について.....105
「西域をゆく」あとがき.....106
英訳井上靖詩集序文.....107
「現代の随想 井上靖集」あとがき.....108

「井上靖歴史小説集」内容見本 著者の言葉.....109
「井上靖歴史小説集」あとがき(抄).....110
「シルクロード詩集」あとがき.....119
「シルクロード詩集 増補愛蔵版」あとがき.....120
「井上靖エッセイ全集」内容見本 著者のことば...120
「井上靖エッセイ全集」あとがき.....121
「井上靖展」図録序.....125
「井上靖自伝的小説集」内容見本 著者のことば...126
「井上靖自伝的小説集」あとがき.....127
中国語訳「井上靖西域小説選」序.....130
中国語訳「西域小説集」序.....131
「シリア沙漠の少年」序.....132
婦人倶楽部と私.....133
頼育芳訳「永泰公主的項鍊」序.....134
*
[明治の月]
「明治の月」をみる.....136
[流星]
「流星」(自作自註).....137
[猟銃]
私の言葉.....139
[闘牛]
「闘牛」について.....139
作品「闘牛」について.....140
「闘牛」の小谷正一氏.....141
[通夜の客]
「吉岡文六伝」を読む.....142

[その人の名は言えない]	「風林火山」と新国劇.....	165
映画「その人の名は言えない」を観る.....	私の夢.....	143
「その人の名は言えない」あとがき.....	「風林火山」について.....	144
[黯い潮]	[春の海図]	
暗い透明感.....	「春の海図」作者の言葉.....	145
[白い牙]	[魔の季節]	
「白い牙」の映画化.....	「魔の季節」作者の言葉.....	147
[黄色い靴]	[嫉捨]	
「黄色い靴」作者の言葉.....	「嫉捨」.....	148
[山の湖]	[短篇集「愛」]	
「山の湖」あとがき.....	映画「愛」原作者の言葉.....	148
[戦国無頼]	[篝火]	
「戦国無頼」について.....	「篝火」について.....	149
「戦国無頼」のおりょうへ.....	[淀どの日記]	150
[春の嵐]	淀どの日記.....	
「春の嵐」あとがき.....	受賞の言葉.....	151
[緑の仲間]	山田五十鈴さんと「淀どの日記」.....	
「緑の仲間」作者の言葉.....	山田さんと「淀どの日記」.....	152
明るい真昼間の勝負.....	[真田軍記]	153
[座席は一つあいている]	真田軍記の資料.....	
「座席は一つあいている」作者の言葉・ランナー寸感.....	「本多忠勝の女」について.....	154
[風と雲と砦]	[満ちて来る潮]	
「風と雲と砦」作者の言葉.....	登場人物を愛情で描く.....	157
「風と雲と砦」原作者として.....	映画化された私の小説「満ちて来る潮」.....	157
「風と雲と砦」壮大なドラマ化の中で.....	[黒い蝶]	158
[若き怒濤]	「黒い蝶」読者の質問に答える.....	
「若き怒濤」作者の言葉.....	[白い風赤い雲]	179
[あすなる物語]	「白い風赤い雲」作者の言葉.....	
「あすなる物語」作者の言葉.....	[白い炎]	183
[花と波濤]	[氷壁]	
「花と波濤」作者の言葉.....	「氷壁」わがヒロインの歩んだ道.....	160
紀代子に托して.....	美那子の生き方.....	161
[昨日と明日の間]	[天平の臺]	
「昨日と明日の間」をみて.....	「天平の臺」の登場人物.....	161
[戦国城砦群]	「天平の臺」について.....	
「戦国城砦群」作者のことば.....	心温まる“普照”との再会.....	162
[風林火山]	「天平の臺」の作者として.....	
「風林火山」の劇化.....	「天平の臺」上演について.....	163
「風林火山」原作者として.....	「天平の臺」の読み方.....	163
「風林火山」の映画化.....	「天平の臺」の作者として.....	164

「天平の壺」ノート..... 193	[盛装]
[犬坊狂乱]	「盛装」作者の言葉..... 222
犬坊狂乱について..... 195	[風濤]
[地図にない島]	作品「風濤」の喜び..... 223
「地図にない島」作者の言葉..... 196	「風濤」韓国訳の序に替えて..... 224
[揺れる耳飾り]	[塔二と弥三]
「揺れる首飾り」作者の言葉..... 197	「塔二と弥三」について..... 224
[朱い門]	[紅花]
「朱い門」あとがき..... 197	「紅花」作者のことば..... 225
[ある落日]	[楊貴妃伝]
「ある落日」作者の言葉..... 198	「楊貴妃伝」の作者として..... 226
「ある落日」あとがき..... 198	原作者として..... 227
[楼蘭]	[後白河院]
「楼蘭」の舞踊化..... 199	「後白河院」の周囲..... 228
「楼蘭」新装版あとがき..... 199	[凍れる樹]
[川村権七逐電]	「凍れる樹」作者の言葉..... 232
「川村権七逐電」作者のことば..... 200	[化石]
[敦煌]	判らぬ“一鬼”の運命..... 232
辺境地帯の夢抱いて..... 201	映画「化石」と小説「化石」..... 234
「敦煌」作品の背景..... 202	[おろしや国酔夢譚]
敦煌を訪ねて..... 203	「おろしや国酔夢譚」の旅..... 236
小説「敦煌」の舞台に立ちて..... 206	「おろしや国酔夢譚」の舞台..... 247
小説「敦煌」ノート..... 210	受賞の言葉..... 249
敦煌 砂に埋まった小説の舞台..... 213	日本漂民の足跡を辿って..... 250
[河口]	[西域物語]
「河口」作者の言葉..... 214	「西域物語」作者の言葉..... 259
[月光]	[ローマの宿]
「月光」作者の言葉..... 214	「ローマの宿」作者の言葉..... 259
[群舞]	[花壇]
「群舞」作者の言葉..... 215	「花壇」作者のことば..... 260
「群舞」著者のことば..... 215	[本覚坊遺文]
[洪水]	本覚坊あれこれ..... 260
「洪水」上演について..... 216	「本覚坊遺文」ノート..... 262
[蒼き狼]	[異国の星]
「蒼き狼」について..... 216	「異国の星」作者の言葉..... 267
原作者のことば..... 217	[異域の人他]
原作者として..... 218	新版「異域の人 自選西域小説集」あとがき..... 268
[しろばんば]	[孔子]
「しろばんば」の幸運..... 219	いまなぜ孔子か..... 268
「しろばんば」私の文学紀行..... 220	小説「孔子」の執筆を終えて..... 272
「しろばんば」の挿絵..... 221	中国の読者へ..... 276

雑纂

[追悼文]..... 285

古知君のこと 渋沢敬三氏を悼む 永松君へのお
別れのことば [鹿倉吉次追悼文] 堂谷さんと私
竹林君のこと 吉川先生のこと 高野君のこと・
弔詞 弔詞(露木豊) 追悼・廖(りょう)承志先生
北京でのひと時 平岡君のこと 森さんのこと
永野さんの笑顔 野間さんのこと 弔詞(今里廣
記) **桑原武夫さんの死を悼む** 弔辞(斎藤五郎)
巨星奔り去る 五島さんへ

[監修者・編集者の言葉]..... 301

「現代世界ノンフィクション全集」監修にあたって
「日本の詩歌」編集委員のことば 昔の海外旅行
「若い女性の生きがい」編者の言葉 全集「10冊の
本」完結に当たって 「世界の名画」編集委員のこと
ば 「日本の名画」編集委員のことば 「現代日本
紀行文学全集」監修者の一人として 「世界紀行文
学全集」監修者の一人として **「大宅壮一全集」編集
委員のことば** 「カンヴァス世界の大家」編集委
員のことば 「日本の名山」監修の言葉 「武者小路
実篤全集」刊行によせて 「日本の庭園美」の監修に
あたって

[公演等パンフレット]..... 309

すゞらんグループ公演「商船テナシテイ」 瀬川純
シャンソン・リサイタル 小沢征爾指揮日フィル特
別演奏会 松美会開催によせて 前進座公派「屈原」
三代目花柳寿輔襲名披露舞踊会 前進座三十五周年
興行 島田帯祭 前進座東日本公演 「天山北
路」芸術祭大賞受賞記念 和泉会別会 くない
会 森井道男「花木なかば」出版記念会 歌劇「香
妃」公演 東宝ミュージカル「屋根の上のヴァイオ
リン弾き」公演 中国越劇日本初公演 松竹九〇
年の正月に 入江さんから教わったこと 橘芳慧
さんへのお祝いの詞 「世田谷芝能」によせて 歌
舞伎・京劇合同公演 和泉狂言会 日中合作大型
人形劇「三国志」特別公演に寄せて

[展覧会パンフレット]..... 323

田辺彦太郎油絵個人展 **須田国太郎遺作展** 今井

善一郎作品展 杉本亀久雄個展 石川近代文学館
開館記念「郷土作家三人展」 第十六回印刷文化展
小林勇水墨画展 彫刻の森美術館に寄せて 第六
回人間国宝新作展 世界写真展「明日はあるか」
国宝鑑真和上像中国展 中国を描く現代日本画展
ガンダーラ美術展 二村次郎写真展「巨樹老木」
小野田雪堂展 東京富士美術館「中国敦煌展」 神
奈川近代文学館「大衆文学展」 白川義員写真展「仏
教伝来」 牧進展に寄せて なら・シルクロード博
覧会 三木武夫・睦子夫妻芸術作品展 近代日本
画と万葉集展 西山英雄展

[その他小文]..... 335

消息一束 おめでとう 本紙創刊五周年に寄せて
最近感じたこと あにいもうと 七人の侍 顔
近況報告 私の夏のプラン 屋上 作家の言葉
「大衆文学代表作全集 井上靖集」筆蹟 オレンジ
アルバム 評 オレンジアルバム 作者のことば
わたしの一日 私の抱負 ふいに訪れて来るもの
編集部的一年間 私の誕生日 作家の二十四時
友への手紙 識見を感じさせる作品 孤愁を歌う
作家 清新さと気品 「婦人朝日」巻頭筆蹟
「現代国民文学全集 井上靖集」筆蹟 「小説新潮」
巻頭筆蹟 菊村到 新しい可能性 読書人の相談
相手として 三友消息 青い眺め 日本談義復
刊100号に寄する100名の言葉 三役の弁 穂高
沖ノ島 「週刊女性自身」表紙の言葉 「私たちは
どう生きるか井上靖集」筆蹟 独自の内容と体裁
「高校時代」巻頭筆蹟 三友消息 税務委員会報
告 さくら 「日本現代文学全集 井上靖・田宮虎
彦集」筆蹟 レジャーと私 娘と私 編集方針
を高く評価 私の好きなスター 私の好きな部屋
横綱の弁 私の生命保険観 「昭和文学全集井上
靖」筆蹟 社会人になるあなたへ 作家の言葉
ベニス 香川京子さん 駿河銀行大阪支店開店告
告文 帝塚山大学推薦のことば 京劇西遊記
「現代の文学 井上靖集」筆蹟 井上吉次郎氏のこと
「婦人公論」のすすめ The East and the West
作家の顔 「婦人公論」の歩みを讃える 「われら
の文学 井上靖」筆蹟 アトリエ風の砦 「豪華
版日本文学全集 井上靖集」筆蹟 木村国喜に注文す

る 岡田茉莉子 型を打ち破る 加藤泰安氏のこと 居間で過ごす楽しみ ハワイ焼けした井上靖さん 「詩と愛と生」筆蹟 吉兆礼讃 「群舞」東方社新文学全書版筆蹟 小坂徳三郎君に、私たちの希望を託したい。 三木さんへの期待 文学界と私 「現代日本文学大系 井上靖・永井龍男集」筆蹟 週刊新潮掲示板 版画の楽しさ、美しさ ロートレックのスケッチ 東大寺のお水とり 雑然とした書棚 美術コンサルタント サヨナラ フクちゃん 「作家愛蔵の写真」解説 広い知性と教養 野心作への刺激に… 序文 茶室を貴ぶ 観無量寿経集註 小料理「稲」案内文 **朝比奈隆氏と私** 怒りと淋しさ 初めて見る自分の顔 「井上靖の自選作品」筆蹟 美しく眩しいもの 佐藤さんと私 「月刊美術」を推せんする 私と福栄 「政策研究」巻頭言 大きな役割 原文 兵衛後援会入会のしおり 信夫さんのこと 「月刊京都」創刊によせて 井上靖一シリーズ日本人 [好きな木] 養之如春 新会長として 成人の日に 二十年の歩み 役員の一員として [便利堂会社概要] 小林さんのこと 週刊読売と私 徳沢園のこと [沼津市名誉市民に選ばれて] 元秀舞台四十年 庶民の体験のなかに感動のドラマが 週刊新潮掲示板 わが人生観 文学館の先駆 岡崎嘉平太「終りなき日中の旅」 オリオンと私 「中華人民共和国現代絵画名作集」推奨の辞 [修善寺工業高校創立五十周年記念寄稿文] 竹内君と私 二十五周年に寄せて 「シルクロード幻郷」巻頭言 「なら・シルクロード博」ごあいさつ 小誌「かぎろひ」に期待する 「なら博」の建築 奈良県新公会堂ごあいさつ 「むらさき亭」を名付けるにあたり 月刊「しにか」創刊によせて 尽己 詩集「いのち・あらたに」に寄せて

[歌詞]..... 398
修善寺農林高等学校校歌 山高ければ 吉原工業高等学校校歌 沼津聾学校校歌 集英社社歌 天城中学校校歌 羽後中学校校歌 北陸大学校歌

[碑文]..... 404
沼津駅前広場母子像碑文 宝蔵院史碑文 修善

寺工業高校碑文 世界貿易センタービルディング基礎の辞 秋田県西馬音内小学校碑文 「内灘の碑」碑文 徳田秋声募碑撰文 滋賀県向源寺（渡岸寺観音堂）碑文 山本健吉文学碑撰文 舟橋聖一生誕記念碑文 長崎物語歌碑撰文 沼津東高校碑文 新高輪プリンスホテル新宴会場の命名 妙覚寺碑文 上山田町碑文

[序跋]..... 410
中村泰明「詩集 烏瓜」序 「創作代表選集13」あとがき 村松喬「異郷の女」序 船戸洪吉「画壇 美術記者の手記」序 安川茂雄「霧の山」序 濱谷浩「写真集 見てきた中国」序 伊藤祐輔「石糞」序 齊藤諭一「愛情のモラル」序 大竹新助「路」序文 「きりんの本5・6年」序 「川」あとがき 大隈秀夫「露草のように」序 山本和夫「町をかついできた子」序 山下政夫「円い水平線」序 永田登三「関西の顔」序 「半島」まえがき 辻井喬「宛名のない手紙」あとがき 小林敬三「宣伝のラフとフェアウェイ」序 池山広「漆絵のような」序 西川一三「秘境西域八年の潜行」序 宮本一男「ハワイ二世物語」序 山崎央「詩集 单子論」序 野村米子「歌集 憂愁都市」序 井上吉次郎「通信と対話と独語と」序 ヤクボーフスキー他著・加藤九祚訳「西域の秘宝を求めて」序 椿八郎「鼠の王様」序 「現代の式辞・スピーチ・司会」序文 A・マルチンス・J「夜明けのしらべ」序 岸哲男「飛鳥古京」序 加藤九祚「西域・シベリア」序 赤城宗徳「平将門」序 伊藤祐輔「歌集 千本松原」序 岩田専太郎画集「おんな」跋 今田重太郎「穂高小屋物語」序 生沢朗画集「ヒマラヤ&シルクロード」序 石岡繁雄「屏風岩登攀記」序 櫻野朝子「運命学」序 「日本教養全集15」あとがき 「わが青春の日々」上巻序 白川義員作品集「アメリカ大陸」序文 秋山庄太郎作品集「薔薇」序 **大西良慶「百年を生きる」跋** 「秘境」序 浦城二郎訳「宇津保物語」序 **持田信夫「ヴェネツィア」序** 井上由雄「詩集 太陽と棺」序 生江義男「ヒッパロスの風」序 尾崎稲穂「蟋蟀(こおろぎ)は鳴かず」序 椿八郎「『南方の火』のころ」序 北条誠「舞扇」まえがき 石川忠行「古塔の大和路」序 「観る聴く 一枚の繪対話集」 本木心

掌「峠をこえて」序 土門拳「女人高野室生寺」序
 安田登紀子仏画集「仏像讃美」序文 「長谷川泉詩集」序 筆内幸子「丹那婆」序 入江泰吉写真集3
 「大和の佛像」序 長井洞著・長井浜子編「続・真向一途」序 松本昭「弘法大師入定説話の研究」序
 坂入公一歌集「枯葉帖」序 白井史朗「古寺巡礼ひとり旅」序 柳木昭信写真集「アラスカ」序 「世界出版業2 日本」序言 坪田歆一編「文典」序 「回想 小林勇」あとがき 「熱海箱根湯河原百景」序
 「北日本文学賞入賞作品集」序 「中国 心ふれあいの旅」序 白川義員作品集「中国大陸 下巻 天壤無限」序文 屠国壁「楼蘭王国に立つ」序 「日本の名随第33 水」あとがき 「日本国立公園」序 大場啓二「まちづくり最前線」序 段文傑「美しき敦煌」序 水越武写真集「穂高 光と風」序 「写真集 旧制四高青春譜」序 白川義員作品集「仏教伝来2 シルクロードから飛鳥へ」序 「西域・黄河名詩紀行」序 TBS特別取材班「シベリア大紀行」序
 「西域・黄河名詩紀行」序 TBS特別取材班「シベリア大紀行」序 「高山辰雄自選画集」英語版序 入江泰吉写真集「新撰大和の仏像」序 駒澤晃写真集「佛姿写伝・近江一湖北妙音」序文 田川純三「絲綢之路行」序 **持田信夫遺作集「天空回廊」**序 舒乙「北京の父 老舎」跋 「中国漢詩の旅」序 「日本の短篇上」序 斯波四郎「仰臥の眼」序 「茶の美道統」序

[アンケート回答]..... 492
 文芸作品推薦あんけいと アンケート わたしのペット 甘辛往来 二つのアンケート 美味求心 時計と賞金 今日の時勢と私の希望 初めてもらったボーナスの使い方 梅本育子詩集「幻をてる人」への手紙 NHKに望むこと 先輩作家に聞く 読書アンケート 一九五六年型女性私の選んだ店 戦後の小説ベスト5 批評家に望む 芸術オリンピック—建築— 旅行なくて7くせ 「あまカラ」終刊によせて 受賞作家へのアンケート

[推薦文]..... 499
 「卒業期」 若杉慧「青春前期」 佐藤春夫「晶子

曼陀羅」 現代女性講座 岸田国土長編小説全集 長谷部成美「佐久間ダム」 日本人の生活全集 世界大ロマン全集 新田次郎「孤島」 新版世界文学全集 富士正晴「游魂」 斯波四郎「禽獸宣言」 加藤てい子「廓の子」 中国詩人選集 世界文学大系 堀辰雄全集 獅子文六作品集 新名将言行録 決定版世界文学全集別巻 シャーロック・ホームズ全集 野口富士男「ただよい」 土門拳「ヒロシマ」 新選現代日本文学全集 野口富士男「海軍日記」 現代人の日本史 萩原朔太郎全集 ふるさと伊豆 瓜生卓造「氷原の旅」 堀田善衛「上海にて」 現代語訳 古典日本文学全集 日本地理風俗大系 世界文学全集 ゲーテ全集 世界名著大事典 野島の調べ 福田宏年「山の文学紀行」 エリオット全集 日本文学鑑賞辞典 日本文学全集 続日本の名城 世界の歴史 少年文学代表選集 大屋典一「孤雁」 平野岑一「世界第六位の新聞」 世界美術大系 安藤更生「日本のミイラ」 図説世界文化史大系 日本山岳名著全集 佐藤春夫監修「古戦場」 歴史小説の旅 岩波文庫 世界の文学 岩波国語辞典 続歴史小説の旅 安藤更生「鑑真」 世界の文化地理 岩波国語辞典 ロシア・ソビエト文学全集 魯迅選集 高木健夫「新聞小説史稿」 日本近代文学図録 ヘディン中央アジア探検紀行全集 漢詩大系 世界文化シリーズ 島田謹介写真集「信濃路」 福田宏年「バルン氷河紀行」 潤一郎新々訳源氏物語 世界の文化 日本の歴史 日本の合戦 歴史詩集 折口信夫全集 フローベール全集 町春草「たのしい書」 少年少女日本の歴史 **世界の名著** (貝塚さんの『論語』を読んで) 西域探検紀行全集 「日本の美術」創刊 世界の戦史 世界の遺跡 立川昭二「鉄」 新十八史略 世界の名画 洋画100選 角田房子「アマゾンの歌」 購読 社国語辞典 **林屋辰三郎「日本 歴史と文化」** 人物・日本の歴史 角川日本史辞典 ジュニア版日本の文学 日本詩人全集 日本の文学 中国の思想 旺文社国語実用辞典 中国文学名作全集 日本文学の歴史 日本古典文学大系 近代日本の文豪 小島直記「岡野喜太郎伝」 日本短篇文学全集 **吉川幸次郎全集** 新潮日本文学小辞典

新版西洋美術史 新潮世界文学 奈良六大寺大観
 現代日本文学大系 新異国叢書 牛島秀彦「アメリカの白い墓標」 工藤一三「柔道の技法」 定本モラエス全集 美術文化シリーズ 岩波講座 世界歴史 日本の名著 世紀別日本と世界の歴史 児島桂子「一死刑囚への祈り」 現代日本の文学 県史シリーズ 角川国語辞典 新版 モラエス「おヨネとコハル・徳島の盆踊(抄)」 有吉佐和子選集 茶道美術全集 現代版画 日本高僧遺墨 池大雅「瀟湘八景扇面帖」 豊田穰「長良川」 東西文明の交流 岩波国語辞典 第二版 特選名著複製全集 近代文学館 複製日本古典文学館 日本の花木 日本古地図集成 永野重雄「和魂商魂」 小高根二郎「詩人伊東静雄」 世界紀行文文学全集 豪華保存版 絵巻・日本の歴史 石森延男児童文学全集 **嵯峨野** 手塚富雄全訳詩集 藍紙本萬葉集 陶磁大系 御物集成 藤田信勝「余録抄」 トルストイ全集 野村尚吾「伝記 谷崎潤一郎」 文房四宝 菅野邦夫「草木と遊ぶ」 美術研究完全復刊 日本国語大辞典 日本庶民文化史料集成 CLASSICA JAPONICA 現代韓国文学選集 現代日本文学アルバム 堀勝彦「写真集 アンナプルナ・ヒマール」 雅楽 アイヌ絵集成 久松潜一監修「萬葉集講座」 全釈漢文大系 彦火火出見尊繪巻 田中仙翁 「茶の心」 深井晋司「ペルシアのガラス」 蔵書版新字源 日本生活文化史 芹沢光治良作品集 大乘仏典 韓国美術全集 中国怪奇全集 入江泰吉「萬葉大和路」 顔真卿祭姪文稿 野村尚吾「浮標燈」 石坂洋次郎「わが日わが夢」 人物日本の歴史 覆刻渡辺畢山真景・写生帖集成 角川日本史辞典第二版 故宮博物院 新修日本絵巻物全集 船山馨小説全集 考古の旅 ローマの噴水 芝木好子作品集 原色茶道大辞典 ほるぷ日本の名画 ウエハラ・ユクオ「ハワイの声」 覆刻日本の山岳名著 平田郷陽作品集「衣裳人形」 コンサイス世界年表 石田茂作「聖徳太子尊像聚成」 **貝塚茂樹著作集** 角川蔵書版辞典セット 岸哲男「萬葉山河」 奥野健男文学論集 小松茂美「平家納経の研究」 唐墨名品集成 油井一ニコレクション 美の宝廊 **石黒孝次郎「古く美しきもの」** 日本原始美術大系 郭沫若選集 壬辰戦亂史 加藤義一郎「茶盃抄」 高専柔道の真髓 佐多稲子全集 現代日本画家素描集 創作陶画資料 茶の本 入江泰吉「佛像大和路」 国宝綴織当麻曼陀茶羅 日本書蹟大鑑 敦煌への道 日本文学全史 藤島亥治郎「塔」 瓜生卓造「スキー風土記」 東山魁夷画文集 源豊宗「日本美術史論究」 新修大津市史 購談社インターナショナル 昭和萬葉集 吉川靈華画集 桑田忠親著作集 平山郁夫「現代日本巨匠選 浄瑠璃寺」 春名徹「にっぽん音吉漂流記」 小島烏水全集 在外日本の至宝 加藤楸邨全集 小松茂美「国宝元永本古今和歌集」 日本現代文学全集 敦煌莫高窟 蔵 陳舜臣「中国の歴史」 速水御舟《作品と素描》 升本順子「シルクロードの女たち」 竹内栖鳳 中国の博物館 **梅原猛著作集** 日本大歳時記 未完の対局 松本和夫「シルクロード物語」 近代文人の書画 會津八一全集 複製日本の雑誌 石元泰博「湖国の十一面観音」 草人木書苑 草人木書苑 染織大辞典 広漢和辞典 古典大系日本の指導理念 安嶋彌「虚と実と」 日本の原爆文学 長澤和俊「シルクロード踏査行」 前田千寸「複製版日本色彩文化史」 富岡鐵齋印譜集「魁星閣印譜」 エボカ 密教美術大観 木本誠二「謡曲ゆかりの古蹟大成」 D&R・ホワイトハウス「世界考古学地図」 大谷家蔵版新西域記 復刻版 **末永雅雄「日本史・空から読む」** 魯迅全集 観音経繪巻 秘仏十一面観音 新潮世界美術辞典 アジア歴史事典 新撰墨場必携 世界の民話 石田幹之助著作集 文人畫粹(画粹)編 中国篇 遥かなる文明の旅 葉上照澄「願心」 河村藤雄「六代目中村歌右衛門」 日本現代詩辞典 **樋口隆康「シルクロード考古学」** 黄河図 昭和文学全集 少年少女世界文学館 裘沙画集「魯迅の世界」 松田壽男著作集 日本の絵巻 原色茶花大事典 学習漫画 中国の歴史3 鑑賞中国の古典 冬青 小林勇画集 「科学と文芸」復刻版 「新しき村」復刻版 小松茂美「古筆学大成」 秋岡コレクション 世界古地図集成 加藤勝代「わが心の出版人」 影印本 天王寺屋会記 明治文学全集 小松茂美「日本絵巻聚稿」 浦西和彦・浅田隆・太田登「奈良近代

文学事典」 日本の名随筆 岩波講座 現代中国
田川純三「大黄河をゆく」 保坂登志子「青の村 山
本和夫文学ガイド」 中国石窟シリーズ シルク
ロードの民話 国際交流につくした日本人 日本
地名資料集成 ビデオライブラリー敦煌 槇有恒
全集 I 憧憬 萬里の長城 ひろさちや「仏教の歴
史」 毎日学校美術館

補遺

[詩歌]

オリンピアの火..... 609
友..... 609
郷愁..... 610
西域四題..... 610
沙漠の花..... 611
桂江..... 611
フンザ溪谷の眠り..... 612
日本の春—うずしお・さくら・飛天—..... 613
車..... 613

[自伝エッセイ]

伊豆の海..... 614
受賞が縁で毎日に入社..... 615
私の結婚..... 616
ペンが記録した年輪..... 617
幼き日の正月..... 619
星のかげら..... 621

[文学エッセイ]

この人に期待する—文学—..... 622
1947年の回顧—文学—..... 623
創作月評..... 624
佐藤先生の旅の文章..... 624
「詩と詩論」その他..... 626
竹中さんのこと..... 628
知的な虚構の世界..... 631
山本さんのこと..... 634

[随想]

今年の春..... 636
中国文学者の日本の印象..... 638
育った新しい友情..... 639
設立三十周年を祝す..... 641

[美術エッセイ]

静物画の強さ..... 643
銀製頭部男子像燭台(部分)..... 644

[紀行]

ありふれた風景なれど..... 645
木々と小鳥と..... 648
わたしの山..... 651
敦煌・揚州..... 652
文明を生み育て葬る..... 655

[選評]

第十一回読売短編小説賞選後評..... 657
新文章読本..... 657

別巻補遺

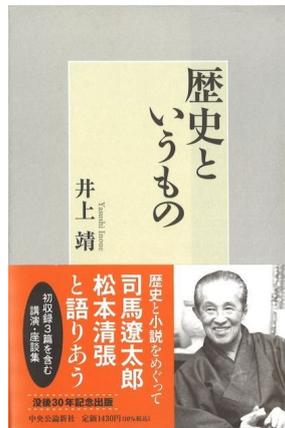
[自作解説] 「天平の薨」映画化のよろこび [追悼
文] 和歌森さんのこと [監修者・編集者の言葉]
「日本文学全集」編集委員のことば 「黄文弼著作
集」監修者のことば [展覧会パンフレット] 石川
近代文学館展 [その他小文] 扉のことば フォ
トエッセイ 「岩稜」お祝の詞 **私と京都ホテル**
[序祓] 北岡和義「檜花 評伝 阿部武夫」序 矢野
克子「詩集 空よ」序 [アンケート回答] 30人への
3つの質問 [推薦文] 串田孫一随想集 少年少
女世界名作文学全集 世界の旅 太田亮「姓氏家
系大辞典」 日本の考古学 ひろすけ絵本 石
坂洋次郎文庫 日本歴史シリーズ 日本建築史基
礎資料集成 愛蔵版世界文学全集 ドキュメント
苦小牧港 世界陶磁全集 日本の美 現代日本写
真全集 学研漢和大事典 近代洋風建築シリーズ
切手 山本健吉全集 八木義徳全

最後に、全集以外で今回参考にした情報や本をまとめてみます。まず、
井上靖記念文化財団 <http://www.inouezaidan.or.jp/>
そして2021年、貴重な対談(鼎談)をまとめた本が2冊発行されたことに、遅ればせながら2021年末に気がきました。

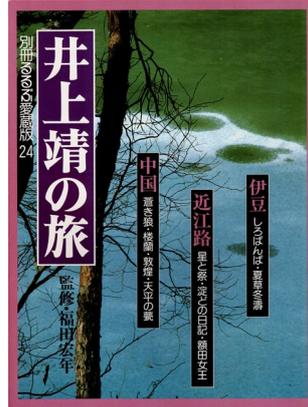
井上さんの小説を味わう上で、以下のムックにある写真などは筆者にとってたいへんありがたいです。



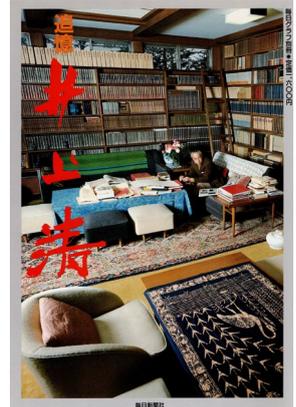
2021.5.30 朝日新聞出版



2021.10.10 中央公論新社



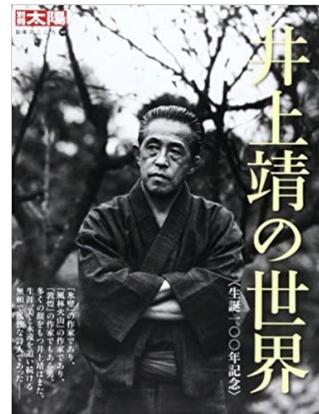
1985 日本交通公社



1991 毎日新聞社

とりわけ、「歴史というもの」の方では、偶然にも本文中で話題にした松本清張さんや司馬遼太郎さんとの鼎談が2編載録されていたので少々おどろきました。

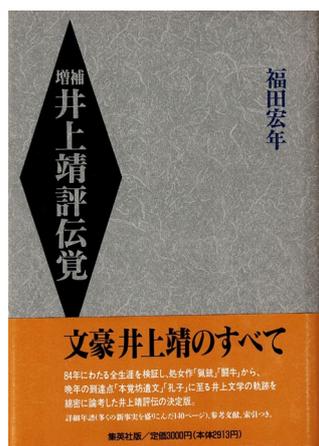
井上家の方々による以下の本も貴重です。



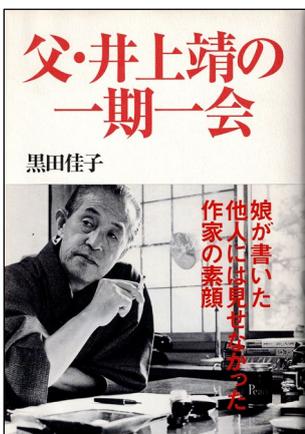
2007 平凡社



井上卓也(二男) 1991 文藝春秋



福田宏年(井上ふみ夫人の次兄の娘婿) 1991 集英社



黒田佳子(二女) 潮出版社 2000



浦城いくよ(長女) ユーフォーブックス 2016

なお、文藝春秋七十年史[資料編](1994)の総目次より、以下の作品があります(Sは昭和、続く数字は年・月)が、座談会・対談以外は全集に収録されていると思います。

小説 S25・4 S25・7~10 S26・8 S27・2 S28・12 S29・7 S30・1 S30・5 S30・12 S31・10 S32・6 S33・7 S34・10~S35・7 S38・1 S41・1~S42・12 S43・5 S45・1 S54・3

詩 S37・7 S40・6 S51・2

ノンフィクション全般 S38・6 S43・8 S49・1~S50・6 S51・8~9 S53・1~S54・2 S54・4~6 S55・1~S56・12

読物・随筆等 S31・3 S33・3 S44・6 S46・1~S47・3 S47・7 S60・9

座談会・対談 S28・3(「人生は長い眼で」、中野好夫・林譲治・松澤一鶴・岸道三・手島志郎らと) S37・2(「シルクロードの虹」、ライシャワーと)

さらに、本文中に転載した「同級生交歓」に加え、「日本の顔」として、井上さんが1970年8月(63歳)、朝比奈さんが1979年6月(70歳)に、それぞれ登場しておられます。

一方、動画は以下のNHKのウェブサイトにあります。

NHK あの人に会いたい File No.72 井上靖
https://www.nhk.or.jp/archives/people/detail.html?id=D0009250072_00000

NHK あの人に会いたい File No.138 朝比奈隆
https://www.nhk.or.jp/archives/people/detail.html?id=D0009250138_00000

また、伊吹和子さん(1929-2015元京都大学文学部国語学国文学研究室勤務→中央公論社)の「めぐり逢った作家たち」平凡社2009でも興味深い話が紹介されています。

2022年1月4日 編集人 記

京都の散歩道 (12) 李登輝さんと彭明敏さん——台湾民主化の二人の父

中華民国(以下、台湾)は、面積約36,000 km²で九州とほぼ同じ、人口約2,300万人で日本の約5分の1(なお近畿2府4県で約2050万人)です。一方、中華人民共和国(以下、中国)は、面積約9,479,000 km²、人口約14億人ですので、台湾は中国に対し、面積で約260分の1、人口で約60分の1と小さい国といえます。しかしこのような表面的な数字とは異なり、台湾は大国中国と同様に世界の中で重要な位置づけにあります。政治面では言わずもがな、経済・産業面でも世界最大のファウンドリ(半導体デバイスを生産する工場)は、台湾積体回路製造股份有限公司 Taiwan Semiconductor Manufacturing Company, Ltd. TSMC。昨今の半導体不足による自動車生産への影響でも顕著なように、TSMCは世界経済に与えるインパクトが極めて大きく、熊本には2024年の稼働開始をめざしてTSMCの工場誘致が決定しています。

そのようなTSMCに象徴される現在の台湾の民主化と発展の基礎を築いた二人の父——李登輝(りとうき Lee Teng-hui、1923.1.15–2020.7.30)さんと彭明敏(ほうめいびん Peng Ming-min、1923.8.15–)さん。李さんに関してはよく知られていますが、彭さんに関しては、筆者の知る限り、日本語の本も本稿で紹介する本以外にほとんどなくWikipediaでもほんの僅かな扱いです。実は、筆者も最近上梓され極めてインパクトに富んだ2冊

(李1)河崎眞澄、『李登輝秘録』、産経新聞出版(2020.7.31: 逝去翌日)

(彭1)近藤伸二、『彭明敏』、白水社(2021.5.30)

をセットで読むまで、恥ずかしながら、彭さんについてはまったく無知でした。京大関係者なら李さんは同窓の意識も強くご存じだと思いますが、彭さんも三高卒業後に東京帝大に進んだので京大に縁があるといえます。もとより筆者は台湾の歴史や政治に詳しいわけでもありませんが、上記2冊から学んだ知識に基づき、ごく基礎的な事実だけではあるものの、まとめてみたいと考えました。なお、李さんの方は逝去後も

(李2)李登輝、『愛する日本人へ——日本と台湾の梯となった巨人の遺言』、宝島社(2020)

(李3)早川友久、『総統とわたし——「アジアの哲人」李登輝の一番近くにいた日本人秘書の8年間』、ウェッジ(2020)

(李4)李登輝、『台湾の主張 [新版]』、PHP文庫(2021)

などの本が発行されています。一方、彭さんに関する和書も同様に追加したいと



2020.7.31発行

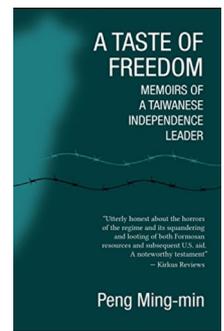


2021.5.30発行

ころですが、彭さんに直接関係する和書は以下に示す1970年代の2冊程度に限られるようです。

(彭2) 彭明敏・黄昭堂¹、『台湾の法的地位』、東京大学出版会 (1976)

(彭3) 彭明敏、『自由台湾への道——新時代の旗手・彭明敏自伝』、社会思想社 (1996)、ただし原著は古く Peng, Ming-min, *A Taste of Freedom: Memoirs of a Taiwanese Independence Leader* (1972)



台湾といえば、まず思い浮かぶのは蒋介石（しょう かいせき、Chiang Kai-shek、1887–1975）と、その子である蔣経国（しょう けいこく、Chiang Ching-kuo、1910–1988）ではないでしょうか（蒋介石については以下の本など）。

(蔣1) 阿川弘之²、『蒋介石の死』、正論 (1975) [阿川弘之全集第十七巻、pp.34-35、新潮社 (2006)]

(蔣2) 保坂正康、『蒋介石』、文春新書 (1990)

(蔣3) 関榮次、『蒋介石が愛した日本』、PHP新書 (2011)

日本がポツダム宣言を受諾した1945年8月14日、蒋介石は『抗戦勝利にあたり全国軍民および全世界の人々に告げる演説』で「怨みに報いるに怨みをもってせず」——「以德報怨」と述べたことはよく知られており、筆者も学生時代に祖父宅に居候した際、このことを祖父から感慨深く教えられました。阿川さん^(蔣1)も

敵国元首のこの言葉に私は深い感銘を受けた。それは、スターリンもチャーチルもトルーマンも毛沢東も口にしなかった言葉で、むしろ、勝者の立場に在った時代の日本に、さういふことを言った政治家は一人もいなかった。

と書いています。

爾来、筆者には「蒋介石は徳ある軍人」というイメージが強かったのですが、戦後の台湾について勉強すると、評価は正反対になりました（蒋介石神話）。外省人（戦後、蒋介石の国民党政権とともに中国から台湾に移ってきた人々とその子孫）が本省人（戦前からの台湾住民とその子孫）に対して1947年2月28日に暴行を加えたことに端を発する「二・二八事件」や、1987年7月の解除まで続く「白色テロ（李さんによると、犠牲者は三万人を下らない）」などの独裁・恐怖政治が行われました（省籍矛盾：少数で支配層の外省人と、多数で被支配層の本省人との対立）。1975年4月、蒋介石の死のあと総統を継いだ息子の蔣経国（最初の夫人で不遇だった毛福梅の子であって、3番目の夫人で華やかにニューヨークで105歳まで生きた宋美齡の子ではありません）は人望も厚かったようですが、蒋介石時代の国民党がもたらした負の遺産は色濃く残っていました。



¹ 黄昭堂 (1932–2011)、昭和大学名誉教授、台湾独立建国連盟主席 (1995–2011の16年間)。

² 阿川弘之 (1920–2015)、「日本李登輝友の会」名誉会長でもありました。

そのような台湾を、異なる立場から、時に離れて時に近く先導したのが李さんと彭さんであるといえます。李さんは一昨年97歳で逝去されましたが、彭さんは98歳の今もご健在だそうです。お二人の実に百年近い波乱の人生と偉大な仕事を的確にまとめることはとても困難ですので、以下では年表の形で整理することにし、ご関心のある方はぜひとも河崎さんの本と近藤さんの本をセットで読んでいただきたいと思います。



2ページあとの年表をもって本文の結びとしますが、その前に若干の補足説明を挿入しましょう。

○1895年4月17日に日清講和条約（日本では下関条約、中国では馬関条約と呼ぶ）によって台湾が清朝から日本に割譲され、ポツダム宣言後の1945年10月25日まで日本の統治が続きました。台湾ではこの約50年間の時代を「日據(拠)」あるいは「日治」と呼びます。教育関係では、1922年に旧制台北高等学校（余談ながら「次郎物語」の下村湖人が校長を1929–1931に務めてもいることに今回気付きました）、1928年に台北帝国大学（現在の国立台湾大学、初代総長は幣原坦で、戦後に総理を務めた喜重郎の兄）が設立され、戦後は日本の帝大の学生は無条件で台湾大学に編入できました。李さんも彭さんもそのケースです。

○ここで、李さんと彭さんの対照的な人生が的確に要約されている近藤さんの文章を、少し長くなりますが(彭1)から引用します。

戦前、東京帝国大学で学んだ彭明敏は、日本の敗戦に伴って台湾に戻り、台北帝国大学を引き継いだ台湾大学に編入する。卒業後、同大学で研究者生活をスタートし、カナダとフランスへの留学も経て、若くして国際的に名の知れた法学者となった。そんな本省人エリートを蔣介石総統が率いる中国国民党（国民党）政権は重用した。権力に逆らわなければ、彭明敏は恐らく、李登輝より先に本省人として初の総統となっていたであろう。それなのに、蔣介石の「大陸反攻（中国大陸に攻め入って取り戻す）」という虚構を暴き、独裁体制を厳しく指弾する「台湾人民自救運動宣言（自救宣言）」を作成し、反乱罪容疑で逮捕される。特赦で自宅に戻ってからも軟禁生活が続いたが、綿密な計画の下、厳重な監視の目をかいくぐって海外に脱出した。そして、長く米国で台湾の民主化と独立運動に打ち込んできた。（中略）一方、彭明敏と同じ年に生まれた李登輝も、戦前は京都帝国大学に籍を置くエリートだった。彭明敏とは台湾大学時代からの友人だったが、国民党の懐に飛び込み、内部から改革するやり方を選んだ。ともに日本統治時代の台湾で生を受け、日本の帝国大学に進んだ二人は、最高指導者と海外亡命者という正反対の人生を歩んだのである。

○李さん自身の言葉でとりわけ印象深いのは、文献(李4)の中で述べている次の一節です。

歴史はさまざまな屈折と逆説に満ちているようにみえるが、それはおそらく必要だった過程なのである。大きな視点で見れば、歴史に逆行しているとされていたことも、私たちのい

まを支えている。私は蔣介石と蔣経國二人の先人たちの功績は、大変偉大なものだ信じている。そして私たちは、その基礎の上に立ってこれからの政治を模索していけばいいのである。先人たちに学ぶことなくただ批判するのも間違いであり、また「李登輝、お前は先人たちと違うことをしているから間違っている」というのもおかしなことなのだ。

この言葉は日本の本を生涯最も尊重し膨大な読書を重ねた哲人でもある李さん（旧制台北高校時代には岩波文庫だけで700冊以上も所有していたそうですし、[\(李3\)](#)によると「作家で李登輝夫妻の親友だった司馬遼太郎氏の記念館の書庫を私も見たことがあるが、李登輝の書庫も負けていない」）の深い思索（キーワードはアウフヘーベン＝止揚）に基づいていると思います。

○李さんの京都帝大時代に関する記述は多くの本にありますが、彭さんの三高時代のことは文献[\(彭3\)](#)くらいしかありませんので、いくつか以下に引用します。

- ・私は、〔編集人挿入〕関西学院にわずか一年学んだだけで、二つの名門校、すなわち慶應大学経済学部と三高に合格したが）ためらうことなく三高へ進んだ。神戸から京都へ引っ越した私は、人生の中で最も幸せな時代を過ごすことになった。三高は「自由」を教育方針としていることでよく知られていた。私が入学した頃、学校は、この自由の伝統を守るために戦っていた。

- ・学校と教授たちは、自分たちや生徒のために、最低限の「知と個人の自由」を守ろうと必死に頑張っていた。

- ・私は本を買い漁り、高校生には不相応なほどの蔵書ができた。ある日、吉田神社の境内を散歩している時、ふと大きな高揚感を感じた。この時が人生で最も幸福を感じた瞬間と言える。というのも、私には何の心配事もなく、ただ好きな本を買ってあればよかったからである。私は、恐いもの知らずの十七歳の少年だった。

- ・教授陣のなかに、土井〔編集人挿入〕虎賀壽 どれとらかず、1902-1971）という哲学科の教授がいた。彼は個人主義者であり、軍部政権に対し無言の批判を貫き、服装や言動に無頓着な姿勢をもって、物心両面に対する統制政策に反旗を翻していた。彼の反抗精神は、私たちにも伝わり、生徒からも尊敬されていた。

- ・私の心理学の教授は（中略）不意に、一番興味のある話題について、心の中にあることを思ったままに正直に文章にするように言った。教授は文章を秘密にすると約束した。そこで私は、中国侵略を非難する作文を書くことにした。（中略）数日後、教授から部屋に来よう呼び出された。彼は声をひそめると、私の意見を決して口外しないことを約束し、同時に当時の情勢に深い憂いを見せた。教授は、「この意見は自分の胸にしまって、誰にも話してはいけないよ」と注意してくれた。

○李登輝さんと彭明敏さんは以上のような立場の違いがありながらも、お互いを尊敬し、1996年の総統選で対決したときも、相手の党は批判しても個人的には批判は抑制したという「君子の争い」が語り継がれているそうです。戦後の国民党支配による台湾の不幸は大きいですが、そんな中であって、このような学識と見識と信念に満ちた二人の指導者を仰ぐことができたことは、不幸中の幸いであると思います。

年表

李 登輝 (藍色は国民党のカラー)	彭 明敏 (緑色は民進党のカラー)
1923.1.15 誕生(日本名: 岩里武則)	1923.8.15 誕生
1941.4 台北高等学校入学	1940 三高入学
1943.10 京都帝大農学部入学 柏祐賢助教授(当時の「北支の経秩序」に強い影響を受ける	1942 東京帝大法学部入学 旧日本軍への服役義務はなかったが志願拒否
1943.12 旧日本陸軍に志願して入隊	1945.4 長崎で敵機襲来に遭い、左腕を失う
1945.8 日本敗戦、李登輝は陸軍除隊	1945.8 長崎で原爆投下に遭遇
1946.4 台湾大学農学部に入編	1946.1 台湾に帰国
	1946夏 台湾大学法学部に編入
1947.2.28 二・二八事件	
1948.8 台湾大学卒業、農学部助教に就任	1948夏 台湾大学法学部を卒業し、同学部助教に就任
1949.10 北京で中国共産党政権の「中華人民共和国」が成立 1949.12 蒋介石と国民党政権の「中華民国」政府が台湾に移る	
1952.3 米・アイオワ州立大に留学(後にノーベル経済学賞1979を受賞するセオドア・シュルツがいた)	1951 カナダ・マックギル大学に留学(1953修士号取得)
1953.4 修士号取得、帰台して台湾大学講師	1952.7 フランス・パリ大学に留学(1954法学博士号取得)
	1954 台湾大学法学部副教授に就任
	1956 キッシンジャーの招待で米・ハーバード大学のセミナーに参加
1957.7 農村復興聯合委員会技士、台湾大学副教授(34歳)	1957 台湾大学法学部教授に就任(34歳)
1961.6.16 日本に亡命していた王育徳(台湾独立建国聯盟に関わり後に明治大学教授)を訪問→独立運動家からも水面下で信頼を得る	1961.9 国民党政権代表団顧問として国連総会出席
1965.9 米・コーネル大に留学	1964.9 謝聡敏・魏廷朝とともに「台湾自救運動宣言」を作成・印刷したところで逮捕(41歳)
1968.7 農学博士号を取得して帰台、台湾大学教授に(45歳)	1965.4 懲役8年の判決
	1965.11 特赦で釈放。以後、特務の監視下
	1970.1.3 香港、バンコク、コペンハーゲン経由で1.5にスウェーデンに脱出(46歳)
1971.10 中国国民党(国民党)に入党(48歳)	1970.9 米国に移り、ミシガン大学客員教授に就任
1971.10 中華人民共和国が国連加盟し「中国の代表権」、台湾は国連脱退	
	1972.2 台湾独立建国聯盟主席(48歳、期間は1年間)
1972.6 蔣経國が行政院長就任、李登輝を農政担当の政務委員に任命 1972.9 田中角栄が周恩来と会談、中国と国交樹立、台湾とは断交	
	1973 オハイオ州のライト州立大学客員教授に就任
1975.4.5 総統の蒋介石が死去、副総統の嚴家淦が昇格、蔣経國が国民党主席 1978.5.20 蔣経國が第6代総統に就任	
1978.6.9 台北市長に就任、台湾大教授辞職(55歳)	
1979.1 米国が中国と国交樹立、台湾とは断交 1979.4 台湾関係法制定	
1979.12 国民党の中央常務委員に初当選	1979.2 米国議会公聴会で「台湾関係法」について証言
1981.12 台湾省主席に就任(58歳)	1983.2 米国議会公聴会で戒嚴令解除など台湾民主化について証言
1984.5 蔣経國が第7代総統に就任、李登輝は副総統に就任(61歳) 1986.9 初の野党、民主進歩党(民進党)が成立 1988.1 蔣経國が死去、李登輝は第7代総統(代行)に昇格	
1988.7 国民党主席に就任(65歳)	
1990.5 総裁選で第8代総統に就任(67歳)	
1990 李登輝が彭明敏を「国是会議」に招待するが辞退	
	1992.11.1 22年ぶりに台湾に帰国(69歳)
	1995.2 民進党に入党
1996.3 初の総裁直接選で 国民党 の李登輝(54.00%)が 民進党 の彭明敏(21.13%)らを破り、第9代総統に就任(73歳)	
	1997 民進党を離党
2000.3 総裁選で 民進党 の陳水扁(39.30%)が 国民党 の連戦(23.10%)らを破り、第10代総統に就任 彭明敏は総統府資政に就任(6年間)	
2004.3 総裁選で 民進党 の陳水扁(50.11%)が 国民党 の連戦(49.89%)を破り、第11代総統に就任	
2008.3 総裁選で 国民党 の馬英九(58.45%)が 民進党 の謝長廷(41.55%)を破り、第12代総統に就任	
2012.1 総裁選で 国民党 の馬英九(51.60%)が 民進党 の蔡英文(45.63%)らを破り、第13代総統に就任	
2016.1 総裁選で 民進党 の蔡英文(56.12%)が 国民党 の朱立倫(31.04%)らを破り、第14代総統に就任	
2020.1 総裁選で 民進党 の蔡英文(57.13%)が 国民党 の韓国瑜(38.61%)らを破り、第15代総統に就任	
2020.7.30 李登輝死去(97歳)、彭明敏は葬儀委員を務める	

追記 1

李登輝さんの京都帝国大学での恩師は柏祐賢(すけかた: 1907-2007) 先生(当時は助教授)ですが、ご子息(二男)の柏久(1947-2020)元京都大学教授による著書



(李5)『李登輝の偉業と西田哲学—台湾の父を思う—』

が2019年に上梓されました。編集人は不勉強のため、西田哲学を根幹とする本文はまだ十分に理解できておりませんが、「序」や「おわりに」など、余命が少ないことを自覚した柏久さんが正

産経新聞出版 (2019)

に遺言のように言葉を選んで表現しておられ胸にせまります (柏久さんは李登輝さんを追うように2020年11月22日に亡くなりました)。本書には、(李1)の著者の河崎眞澄さんによる

『李登輝・前総統の日本訪問同行記』 (訪日は2004年12月27日-2005年1月2日)

『永遠に二三歳のまま、僕は柏祐賢先生の学生だ—「李登輝の偉業と西田哲学に寄せて」』

が掲載されています。柏久さんは

『産経新聞』に「李登輝秘録」を登載中で忙しい彼に寄稿をお願いした。彼は快く引き受けてくれて原稿が届いた。届いた原稿を読み、私は涙が止まらなかった。というのは、その原稿が単に本書を締めくくるだけのものではなかったからである。

と表現しておられます。なお、2004年12月31日には柏先生(当時97歳)宅で李さん(当時81歳)との61年ぶりの再会が実現しますが、その前に計画された京大キャンパス入構は、大学当局から出された公権力を入れない(SP警護なし)という条件のため、残念ながら実現しなかったことを付記します。

追記 2

彭明敏さんには奇跡の台湾脱出劇があり、その脱出を中心となって支えたのが日本でのグループであることは誇らしく感動的です。1972年に出版された彭さん自身による本(彭3)には

残念ながら、この計画には非常に多くの人々が関与しており、これら勇気ある真の友人たちに危険が及ぶのを避けるために、現時点では脱出の方法についてつまびらかにすることはできない。しかし、政治亡命を認めてくれたスウェーデン政府以外には、どの国の政府の援助も受けていないことだけは確かである。

と語っています。

近藤伸二さんによる著書(彭1)にはこの脱出劇が詳細に述べられており、台湾青年社に参加していた宗像隆幸(1936-2020)さんを中心とするグループが国境を越えて忍耐強く周到に協力した賜であることが理解できます。なお、宗像さんには台湾独立問題につき多数の著書がありますので、ぜひ



文藝春秋 (1996)

まどか出版 (2008)

ひご参照いただければと思います。その中の一冊「台湾建国——台湾人と共に歩

いた四十七年」によれば、1998年以前は

日本のマスコミで台湾に支局を置いていたのは、中国に支局を置くことを認められていなかった産経新聞だけであったが、この年（1998年）に読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、東京・中日新聞、共同通信、時事通信、NHKも台湾に支局を開設した。産経新聞は三十一年ぶりに中国での支局開設を認められて（中略）このときまで産経新聞の読者以外の日本人は、台湾情報に触れる機会が少なかったが、日本のマスコミの支局が台湾に揃ったことで台湾情報が激増し、日本人の台湾に関する関心も急激に深まった。

ということです。

追記3

李登輝さん・彭明敏さんと現在の蔡英文(さい えいぶんTs'ai Ing-wen、1956-) 総統との関係につき、少し補足します。

(蔡1) 蔡英文、『蔡英文自伝』、白水社(2017、ただし原著は2011)

(蔡2) 張瀨(正しくは；静)文、『蔡英文の台湾——中国と向き合う女性総統』、毎日新聞出版(2016)

(蔡3) 近藤伸二、『米中台現代三国志』、勉誠出版(2017)

などが筆者には参考になりました。(蔡2)の年表によりますと、蔡さんは、台湾大学法律学科卒業後、米コーネル大学大学院やロンドン大学政経学院大学院に留学し、帰国後は国立政治大学や東呉大学で教鞭をとりますが、1992年には経済部国際経済組織顧問となり、以後行政院や国家統一委員会などの主要ポストを歴任し、2004年に民進党に入党します。

蔡さんの1990年代の活躍は、当時の総統であった李さんの目にとまり、1998年の兩岸政治ゲーム汪道涵(おう どうかん、中国側主席代表)・辜振甫(こ しんぽ、台湾側主席代表)会談の紅一点最年少の代表団員にも抜擢され、2000-2004年の民進党の陳水扁総統時代には行政院大陸委員会主任委員(いわゆる「小三通」実現の偉業)を経て、現在のキャリアにつながっていきます。李さんと蔡さんは党こそ異なりますが、厚い信頼関係で結ばれていたそうです。また、蔡さんが民進党に入党してから2年ほどは彭さんの総統府資政時代とも重なりました(なお、2016年の蔡総統からの就任要請は断って距離をおいているとのこと)。

謝辞

李登輝さんと彭明敏さん生誕99年の2022年1月、本稿のドラフトをご覧ください、貴重なお話を聴かせていただいた(李1)(李5:部分)と(彭1)(蔡3)の著者河崎眞澄氏(産経新聞 元台北支局長・現論説委員兼特別記者、現東京国際大学国際関係学部特任教授)

近藤伸二氏(毎日新聞 元台北支局長・元論説副委員長、現追手門学院大学経済学部教授)

に謝意を表します。

編集人